仙台市文化財調査報告書第454集

六反田遺跡

第14次発掘調査報告書

2017年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第454集
六反田遺跡
第14次発掘調査報告書
二〇一七年三月
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第454集

六 反 田 遺 跡

第14次発掘調査報告書

2017年3月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残されております。当教育委員会といたしましても、先人たちの残してきた貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、市民協働による仙台の住みよいまちづくりに欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は、地下鉄南北線富沢駅の東側で都市整備が進められている、「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」地内にある六反田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

これまで六反田遺跡からは、縄文時代中期中葉から後期初頭の竪穴住居跡や配石遺構などと共に、魚骨やオニグルミ等の自然遺物が出土し、生業活動を考えるうえで貴重な資料となっています。また、北海道～東北北半部で確認されている古墳時代後期の「袋状の掘り込み」を持つ木棺墓などの重要な発見もありました。

ここに報告する調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

また、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、特に地権者である庄子誠司様には、発掘調査の重要性をご理解いただき、ご協力いただきました。

最後になりましたが、未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、6年の月日が過ぎました。仙台市では震災からの復興に向け、「ともに、前へ仙台　～3・11からの再生～」を掲げて、復興事業を進めてまいりました。平成27年12月には、被災した東部と中心部を結ぶ地下鉄東西線が営業を開始するなど、復興に向けた動きが一層進んでおります。そうした中、発掘調査及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成29年3月

仙台市教育委員会
教育長　**大越　裕光**

例　　言

1. 本書は、「共同住宅建設」に伴い仙台市教育委員会が実施した六反田遺跡第14次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 報告書作成業務は、仙台市教育委員会の委託を受け、国際文化財株式会社が行った。
3. 本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査指導係 工藤信一郎、渡部弘美の監理のもと、国際文化財株式会社が担当した。
4. 本書の執筆は下記のとおりである。

   第1章第1節、第3章第1節2…工藤信一郎(仙台市教育委員会)

   第1章第2節、第2章、第3章第1節1･3、第2節、第4章、第5章第1節～第4節、第6章…田口雄一(国際文化財株式会社)

   第5章第5節…伊藤裕基(国際文化財株式会社)

   編集は、田口雄一が担当し、伊藤裕基が協力した。
5. 石器の実測・石材の鑑定及び観察表作成については、工藤信一郎、伊藤裕基、熊谷亮介(東北大学大学院)が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、以下の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略)

   庄子誠司、大木建設株式会社、野村不動産株式会社仙台支店

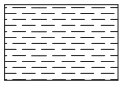
7　調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は仙台市教育委員会で一括保管している。

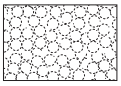
凡　　例

1. 本書の土色については「新版 標準土色帖」2000年度版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
2. 第2図の地形図は国土交通省国土地理院発行「仙台南東部」「仙台南西部」1:25000を使用した。
3. 遺構図中の座標値は世界測地系「平面直角座標第X系」を基準としている。図中及び本文中に記載の方位の北は、座標北を示す。
4. 図版中のレベルは海抜高度(T.P)を示す。
5. 層位名は基本層序をローマ数字、遺構内堆積土については算用数字を使用した。なお、Ⅰ区・Ⅲ区の基本層序については調査時に使用した算用数字をそのまま用いている。
6. 本書の検出遺構については次の略号を使用した。

   SD: 溝跡　SK: 土坑　SX: 性格不明遺構　P: ピット
7. 遺構観察表において(　)は残存値を示す。
8. 本書の出土遺物の分類と登録には次の略記号を使用し、分類ごとに登録番号を付した。

   A＝縄文土器　Ka＝剥片石器　Kb＝磨製石器　Kc＝礫石器　P＝土製品
9. 遺物観察表において(　)は残存値を示している。
10. 遺物実測図の縮尺は1/3とし、剥片石器は2/3とした。
11. 石器・石製品の実測図に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。


節理


敲打痕

12. 掲載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。

本　文　目　次

序　文
例　言
凡　例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1

第２章　遺跡周辺の環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 2

第３章　調査の方法と経過 …… 3
　第１節　調査の方法 …… 3
　　1. 調査区の設定 …… 3
　　2. 調査の方法 …… 3
　　3. 調査の経過 …… 4
　第２節　報告書の作成 …… 4

第４章　基本層序 …… 4

第５章　調査の概要と成果 …… 8
　第１節　Ⅳ層上面検出遺構と出土遺物 …… 8
　　1. 土坑 …… 8
　　2. ピット …… 8
　　3. 河川跡 …… 8
　第２節　Ⅵ層上面検出遺構と出土遺物 …… 10
　　1. 土坑 …… 10
　　2. 溝跡 …… 13
　　3. 性格不明遺構 …… 15
　　4. ピット …… 16
　第３節　Ⅹ層上面検出遺構と出土遺物 …… 16
　　1. 土坑 …… 16
　第４節　ⅩⅤ層上面検出遺構と出土遺物 …… 17
　　1. ピット …… 17
　第５節　包含層出土遺物 …… 19
　　1. ⅩⅡ層出土遺物 …… 19
　　2. ⅩⅢ層出土遺物 …… 20
　　3. ⅩⅤ層出土遺物 …… 20
第６章　まとめ …… 25

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　六反田遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査区配置図 …… 3
第３図　基本層序図 …… 5・6
第４図　Ⅳ層上面遺構配置図 …… 9
第５図　Ⅳ層上面 SK1・2 土坑平面図・断面図 …… 10
第６図　Ⅵ層上面遺構配置図 …… 11
第７図　Ⅵ層上面 SK3 ～ 8 土坑平面図・断面図 …… 12
第８図　Ⅵ層上面 SK9 ～ 12 土坑平面図・断面図 …… 13
第９図　Ⅵ層上面 SD1 ～ 11 溝跡平面図・断面図 …… 14
第 10 図　Ⅵ層上面 SX1 性格不明遺構平面図・断面図 …… 15
第 11 図　Ⅵ層上面 SX2 性格不明遺構平面図・断面図 …… 16
第 12 図　Ⅹ層上面 SK13 土坑平面図・断面図 …… 17
第 13 図　Ⅹ層上面 SK13 土坑出土遺物 …… 17
第 14 図　ⅩⅤ層上面遺構配置図 …… 18
第 15 図　ⅩⅡ層遺物包含層出土遺物 (1) …… 21
第 16 図　ⅩⅡ層遺物包含層出土遺物 (2) …… 22
第 17 図　ⅩⅢ層遺物包含層出土遺物 …… 23
第 18 図　ⅩⅤ層遺物包含層出土遺物 (1) …… 24
第 19 図　ⅩⅤ層遺物包含層出土遺物 (2) …… 25

写　真　図　版　目　次

写真図版１　基本層序・調査区全景・土坑 (1) …… 27
写真図版２　土坑 (2)・河川跡・溝跡・性格不明遺構・包含層遺物出土状況 …… 28
写真図版３　包含層出土遺物 (1) …… 29
写真図版４　包含層出土遺物 (2) …… 30

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

仙台市南部の富沢地区は、昭和 62 年の地下鉄南北線の開業以降、道路網の整備や宅地化が急速に進む地域となっていた。このようななか、仙台市が事業主体となった土地区画整理事業が具体化し、「仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業」が計画され、事業地内に所在する六反田遺跡をはじめとする 14 遺跡を対象として、平成６年から平成 25 年まで継続して発掘調査が行われ、縄文時代から近世に至る幅広い年代を対象とした調査が行われてきた。

今回の六反田遺跡第 14 次調査は、六反田遺跡内で計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。平成 28 年７月 27 日付けで、野村不動産株式会社仙台支店から仙台市太白区大野田五丁目 31 番３・４・５地内において、共同住宅建設の埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。建設予定地は六反田遺跡の南西部にあたり、地下鉄南北線建設に伴って昭和 56・61 年に行われた第２次調査Ⅰ区と、東に隣接するⅢ区に挟まれている。

仙台市教育委員会では、本工事により遺跡の地下遺構が損なわれると判断し、建設工事に先立って本発掘調査を必要とする旨の回答文を平成 28 年７月 29 日付 H28 教生文第 103-045 号で送付した。その後、教育委員会と事業者の協議の結果、計画された建物部分のうち前回第２次調査Ⅰ・Ⅲ区に挟まれた未調査範囲を対象に記録保存を図るための本発掘調査を実施することになった。

第２節　調査要項

調査要項

遺 跡 名：六反田遺跡　(宮城県遺跡登録番号　01189)

所 在 地：宮城県仙台市太白区大野田五丁目 31 番３、４、５

調査面積：156㎡ (対象面積 381㎡)

調査原因：共同住宅建設

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課調査指導係　主任　工藤信一郎　　専門員　渡部弘美

調査組織：国際文化財株式会社

調査員　田口雄一　　調査補助員　伊藤裕基　　計測員　志賀昌弘　　計測補助員　庄子輝男

調査期間：平成 28 年９月 12 日～平成 28 年 11 月 17 日

整理期間：平成 28 年 11 月 17 日～平成 29 年３月 24 日

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

六反田遺跡第 14 次調査区は、地下鉄南北線富沢駅の北東約 120m、仙台市太白区大野田地区に位置する。

大野田地区は、郡山低地と呼称される南縁を名取川、北縁を広瀬川、北西縁を青葉山丘陵により区画された沖積地の名取川下流の北岸部に所在する。周辺は太白山を源とする笊川などの小河川が低地内を曲流しており、これら河川の影響で自然堤防、旧河道、後背湿地が複雑に入り組んだ地形が形成されている。

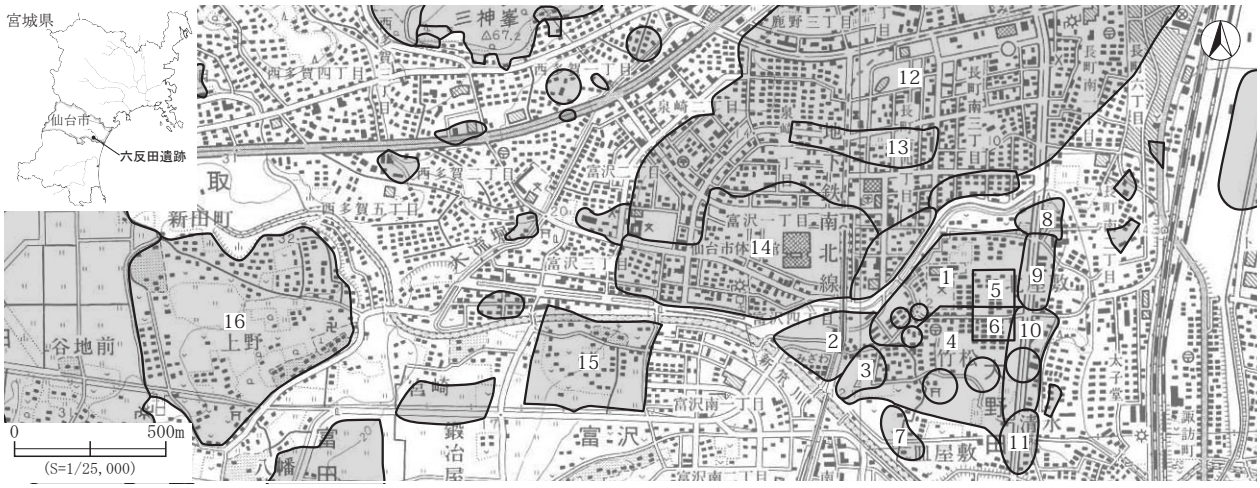
今次調査区は旧河道～自然堤防上に立地し、標高は現況で約 12m である。調査以前の土地利用は宅地である。

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡の所在する大野田地区周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域で、六反田遺跡のほかにも大野田遺跡、大野田官衙遺跡、元袋遺跡、伊古田遺跡、伊古田Ｂ遺跡、大野田古墳群、下ノ内遺跡、王ノ壇遺跡、皿屋敷遺跡、袋前遺跡等が知られている。これらの遺跡からは縄文時代～近世の遺構・遺物が多数確認されている。

当地区及び周辺の歴史的環境の詳細については『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ -』(仙台市教委　2011) を参照されたい。

六反田遺跡の発掘調査は、1976 年に実施された第 1 次調査から今回の調査まで第 14 次を数える。今次調査は、昭和 56 年・61 年に発掘調査を行った第 2 次調査Ⅰ区とⅢ区に挟まれた範囲を対象としている。Ⅰ区からは平安時代の竪穴住居跡、土坑、溝跡、ピット、縄文時代後期の遺物包含層が検出されている。Ⅲ区からは近世の溝跡、平安時代の土坑、溝跡、古墳時代後期～奈良時代の小溝状遺構群、奈良時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文時代後期の竪穴住居跡、土坑、配石、ピットが検出されている。



№.	遺構名	立　地	種　別	時　　代	№.	遺構名	立　地	種　別	時　　代
1	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文 (中～晩)・弥生～平安・近世	11	皿屋敷遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・屋敷跡・水田跡・散布地	縄文 (後)・奈良～近世
2	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡・墓跡	縄文 (中～晩)・弥生～中世					
3	伊古田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文～平安	12	富沢遺跡	後背湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世
4	大野田古墳群	自然堤防	古墳・集落跡	縄文～古墳・平安・中世					
5	袋前遺跡	自然堤防	集落跡	縄文・古墳～平安	13	泉崎浦遺跡	自然堤防・後背湿地	水田跡・墓地	縄文 (後)・弥生・古墳・平安・近世
6	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良					
7	伊古田Ｂ遺跡	自然堤防	畑跡他	古墳・奈良～平安	14	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	集落跡・水田跡	縄文～中世
8	元袋遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文・弥生・奈良～近世					
9	大野田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文 (後)・古墳～平安	15	富沢館跡	自然堤防	集落跡・城館跡	平安・中世
10	王ノ壇遺跡	自然堤防	集落跡・屋敷跡	縄文 (後)・弥生～中世	16	上野遺跡	丘陵	集落跡	縄文・奈良・平安・近世

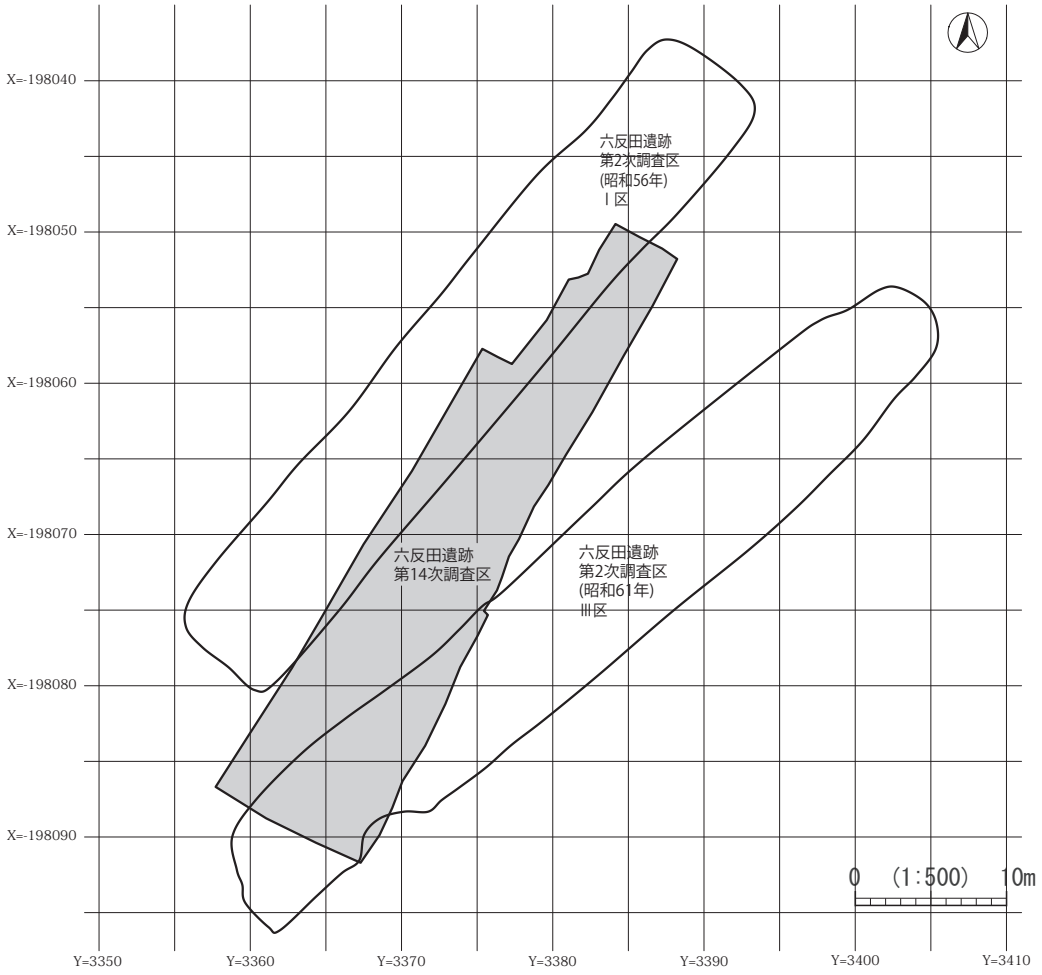
第１図　六反田遺跡と周辺の遺跡

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

1. 調査区の設定

調査は、建築計画範囲内の第２次調査Ⅰ区 (昭和 56 年調査) とⅢ区 (昭和 61 年調査) に挟まれた範囲を対象とし、381㎡の調査区を設定した。調査区の北西側はⅠ区、南東側はⅢ区と重複しており、重複部分は表土掘削後の範囲確認にとどめ、重複部分を除外した 156㎡の調査を行った。



第２図　調査区配置図

2. 調査の方法

表土掘削は事前に仙台市教育委員会の立会いのもと行われ、Ⅳ層上面までの掘削を完了した状態から調査を開始した。Ⅳ層～Ⅵ層上面までの遺構検出と精査は人力で行い、Ⅵ層上面遺構の調査後に縄文時代の調査面であるⅩⅠ層上面まではバックホウ 0.25㎥により掘り下げを行った。ⅩⅠ層～ⅩⅦ層上面の遺構検出と精査は人力で行った。

作図はトータルステーションによる機械測量を主体に三次元 (x、y、z) 座標の記録をとり、土層断面図は手実測と写真実測を併用した。写真撮影は 35mm のカラーリバーサル、モノクロネガとデジタルカメラを併用した。

調査終了後は、事前打合せにより埋め戻しは事業者が行った。

3. 調査の経過

準備作業として８月23日から25日まで重機を使用して、表土除去作業を行った。その後９月12日から、隣接調査区の調査で古代の遺構確認面であったⅣ層～Ⅵ層上面での遺構検出と精査を人力にて行った。Ⅵ層の調査終了後の10月18日・19日に、重機を使用して縄文時代の遺構確認面であるⅩⅡ層上面までの掘削を行った。その後人力にて、ⅩⅤ層までの遺構検出と精査を行った。

ⅩⅤ層調査終了後調査区中央北側に６ｍ×２ｍの下層調査区を設定し、人力によって掘り下げを行い、標高8.7ｍで礫層を確認した。礫層の一部を掘り下げさらに礫層が続く状況を確認し、11月10日に調査を終了した。

第２節　報告書の作成

国際文化財株式会社東北支店において、出土遺物、遺構図面の整理作業を行った。基礎整理作業終了後、報告書作成のため出土遺物の登録・実測図作成・写真撮影と個別遺構図を作成した。その後、遺構・遺物図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。整理・報告書作成中は必要に応じて作業内容の確認・協議を行った。縄文土器・石器の実測図・トレース図については、教育委員会職員が仙台市向田埋蔵文化財整理室において点検を行った。

第４章　基本層序

今次調査区の基本層序は、第２次調査Ⅰ区の基本層序を基に分層を行い、調査区南側では第２次調査Ⅲ区の基本層序を一部参考とした。Ⅰ区基本層序は14層に大別され、Ⅲ区は11層に大別される。今次調査で分層された層序は16層で、Ⅰ区・Ⅲ区との対比によりⅣ層～ⅩⅦ層の14層に大別され、Ⅳ層はａ～ｃ層に細別された。Ⅰ区・Ⅲ区１～３層に対比される層序は、削平により今次調査では確認していない。

以下、各層序の特徴を記載し、Ⅰ区・Ⅲ区基本層と対比が可能な層についてはその旨を記載する。

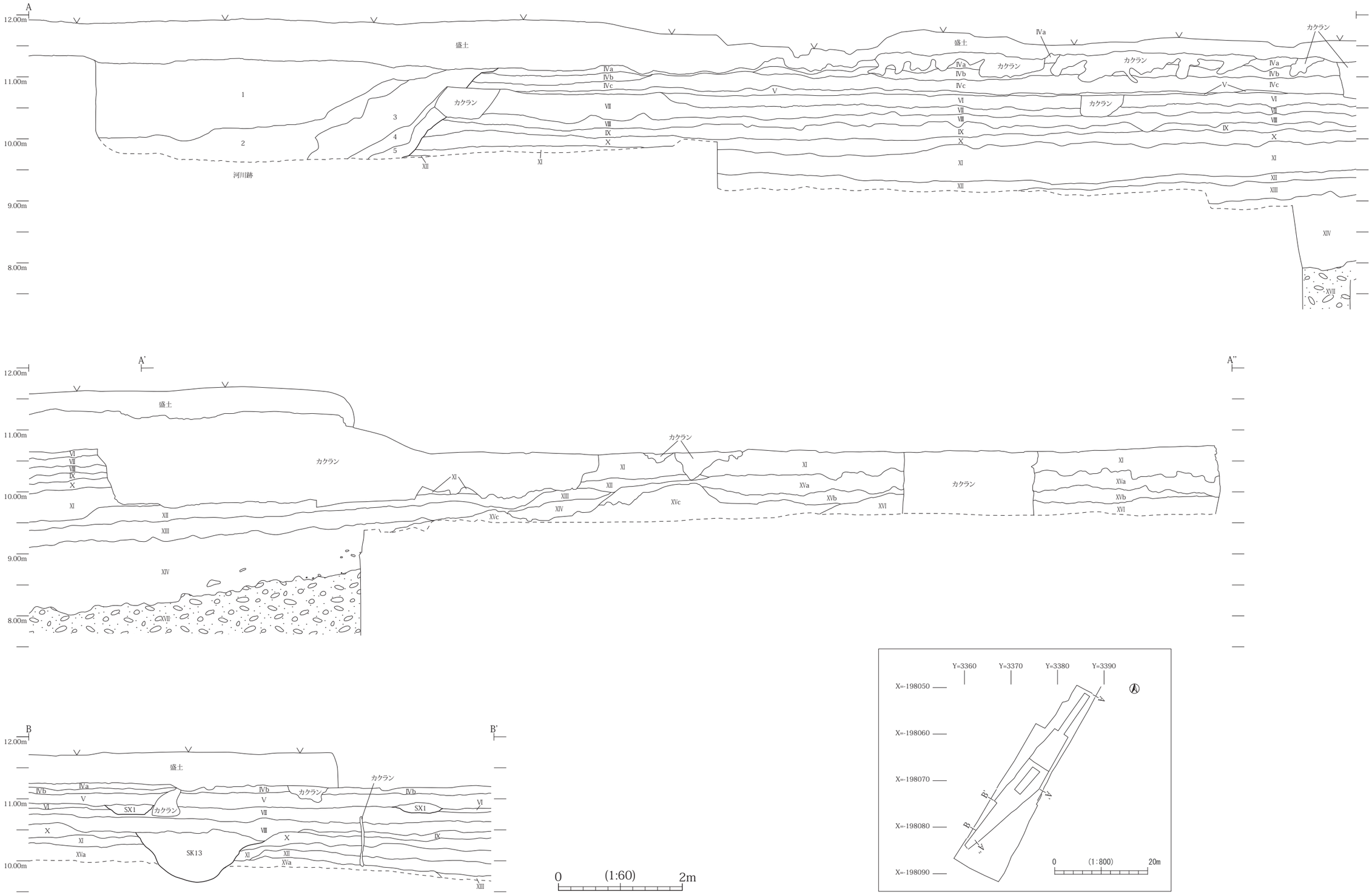
最上層は現代の盛土である。

Ⅳ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は11.10～11.32mである。10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトを基調とし、にぶい黄褐色粘土を多量に含む。さらに酸化鉄、マンガン粒を多量に含むⅣａ層、酸化鉄とマンガン粒を含むⅣｂ層、いずれも含まないⅣｃ層に細別される。Ⅳｃ層は南側では確認されていない。層厚はⅣａ層が５～15㎝、Ⅳｂ層が２～20㎝、Ⅳｃ層が２～30㎝である。Ⅳａ層上面で土坑、ピット、河川跡を検出した。Ⅰ区・Ⅲ区4a～ｃ層に対比される。

Ⅴ層：調査区のほぼ全面で確認された。確認面の標高は10.71～11.10mで、南側が高くなる。10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土を基調とし、褐灰色粘土を少量含む。砂粒を多量に含み、北側は酸化鉄を含む。層厚は２～27㎝で、南側が厚い。Ⅰ区・Ⅲ区５層に対比される。

Ⅵ層：調査区のほぼ全面で確認された。確認面の標高は10.85～10.93mで、南側が若干高くなる。10YR3/3暗褐色粘土を基調とし、暗褐色シルト質粘土を多量に含む。酸化鉄を含み、炭化物を微量に含む。層厚は７～25㎝で、南側は薄くなる。土坑、溝跡、性格不明遺構、ピットを検出した。Ⅰ区・Ⅲ区６層に対比される。

Ⅶ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は10.50～10.78mである。10YR4/2灰黄褐色粘土を基調とし、暗褐色粘土を少量、酸化鉄を多量に含む。層厚は８～46㎝で、中央北側が最も厚くなる。Ⅰ区・Ⅲ区７層


A
12.00m
11.00m
10.00m
9.00m
8.00m
盛土
カクラン
河川跡
A'
A''
B
B'
SK13
SX1
0
(1:60)
2m
Y=3360
Y=3370
Y=3380
Y=3390
X=-198050
X=-198060
X=-198070
X=-198080
X=-198090
(1:800)
20m

第3図　基本層序図

に対比される。

Ⅷ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 10.22 ～ 10.78m で、南側が高くなる。10YR3/2 黒褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色粘土を含む。酸化鉄を多量、炭化物を微量に含む。層厚は 4 ～ 30㎝である。Ⅰ区・Ⅲ区 8 層に対比される。

Ⅸ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 10.12 ～ 10.50m で、南側が高くなる。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を基調とし、暗褐色粘土を含む。炭化物を微量に含み、北側は酸化鉄を多量に含む。層厚は 7 ～ 26㎝である。Ⅰ区 9 層、Ⅲ区 9a･b 層に対比される。

Ⅹ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 9.99 ～ 10.62m で、南側が高くなる。10YR3/3 暗褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色粘土ブロックを多量、炭化物を微量に含む。層厚は 3 ～ 27㎝である。調査区西壁の断面観察で土坑が掘りこまれることを確認した。Ⅰ区・Ⅲ区 10 層に対比される。

ⅩⅠ層：調査区の全面で確認された。確認面の標高は 9.71 ～ 10.41m で、南側が高くなる。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトを基調とし、灰黄褐色粘土を少量、酸化鉄と炭化物を微量に含む。土性は北側の河川跡に向かってシルトから砂に漸移的に変化する。層厚は 12 ～ 65㎝である。Ⅰ区 11a･b 層、Ⅲ区 11 層に対比される。

ⅩⅡ層：調査区の南端を除く範囲で確認された。確認面の標高は 9.25 ～ 10.88m で、南側が高くなる。10YR3/3 暗褐色シルト質粘土を基調とし、灰黄褐色粘土を多量、径 3 ～ 10㎝の礫と酸化鉄を少量含む。北側の河川跡付近はグライ化する。層厚は 8 ～ 46㎝である。Ⅰ区・Ⅲ区 12 層に対比される。縄文時代後期の遺物包含層である。

ⅩⅢ層：調査区の南側を除く範囲で確認された。確認面の標高は 9.18 ～ 10.08m である。10YR3/2 黒褐色粘土を基調とし、灰黄褐色粘土を微量に含む。酸化鉄を含み、炭化物を少量含む。下面は堆積がやや乱れる。層厚は 4 ～ 30㎝である。Ⅰ区 13 層に対比される。縄文時代後期の遺物包含層である。

ⅩⅣ層：調査区の南側を除く範囲で確認された。確認面の標高は 8.93 ～ 10.10m である。10YR4/2 灰黄褐色粘土を基調とし、にぶい黄褐色シルト質砂と砂粒を多量に含む。酸化鉄と炭化物を微量に含む。層厚は 12 ～ 110㎝である。

ⅩⅤ層：調査区の南側で確認された。確認面の標高は 9.80 ～ 10.40m である。土性、混入物の差異により、a ～ c 層に細別される。ⅩⅤa 層は 10YR3/3 暗褐色粘土を基調とし、砂粒を極多量、灰黄褐色シルト質粘土を少量含む。径 3㎝の礫を多量に含み、炭化物を微量に含む。ⅩⅤb 層は 10YR3/3 暗褐色を基調とし、径 3 ～ 15㎝の礫と砂粒を極多量、炭化物を微量に含む。ⅩⅤc 層は 10YR4/2 灰黄褐色粗砂を基調とし、径 5㎝の礫を含み、酸化鉄を少量含む。層厚はⅩⅤa 層が 7 ～ 34㎝、ⅩⅤb 層が 6 ～ 28㎝、ⅩⅤc 層が 60㎝以上である。ⅩⅤa 層上面でピットを検出した。ⅩⅤa 層とⅩⅤb 層は、縄文時代後期の遺物包含層である。

ⅩⅥ層：調査区の南端で確認された。確認面の標高は 9.67 ～ 9.93m である。10YR4/3 にぶい黄褐色粘土を基調とし、砂粒を極多量含む。層厚は 37㎝以上である。

ⅩⅦ層：基底礫層。径 10 ～ 50㎝の礫を基調とし、粗砂を含む。確認面の標高は 8.02 ～ 8.77m で、南東から北西に向かって低くなる。層厚は 105㎝以上である。

第５章　調査の概要と成果

本章では、調査によって検出した遺構、遺物について報告する。Ⅳ層上面、Ⅵ層上面では土坑、溝跡、性格不明遺構、ピット、河川跡を検出し、Ⅹ層上面では土坑、XV層上面ではピットを検出した。これら検出遺構からは、所属時期が比定できる遺物は出土していないが、隣接するⅠ区・Ⅲ区の調査成果からⅣ層上面、Ⅵ層上面遺構は古墳時代後期～平安、XV層上面遺構は縄文時代後期と考えられる。このうち、XV層上面で検出した土坑１基は調査区西壁の観察よりⅩ層から掘り込まれていることを確認した。XⅡ層・XⅢ層・XV層は縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。XⅡ層とXⅢ層は調査区の中央部で確認し、XV層は調査区の南側で確認している。

各遺構は個別に報告するが、ピットに関しては一括して報告する。

第１節　Ⅳ層上面検出遺構と出土遺物

本節では、Ⅳ層上面で検出した土坑２基、河川跡、ピット 25 基について報告する。遺物は、土坑１基から土師器小片が出土しているのみで、図示できる遺物はない。

1. 土坑 (第５図)

SK1 土坑 (第５図)　調査区の南側に位置する。平面形は不整形で、長軸方位は N-20°-E である。検出規模は長軸 152㎝、短軸 116㎝、深さ 31㎝である。断面形はＵ字形で、壁面は内湾して立ち上がる。底面はやや起伏する。堆積土は２層に分層した。遺物は出土していない。

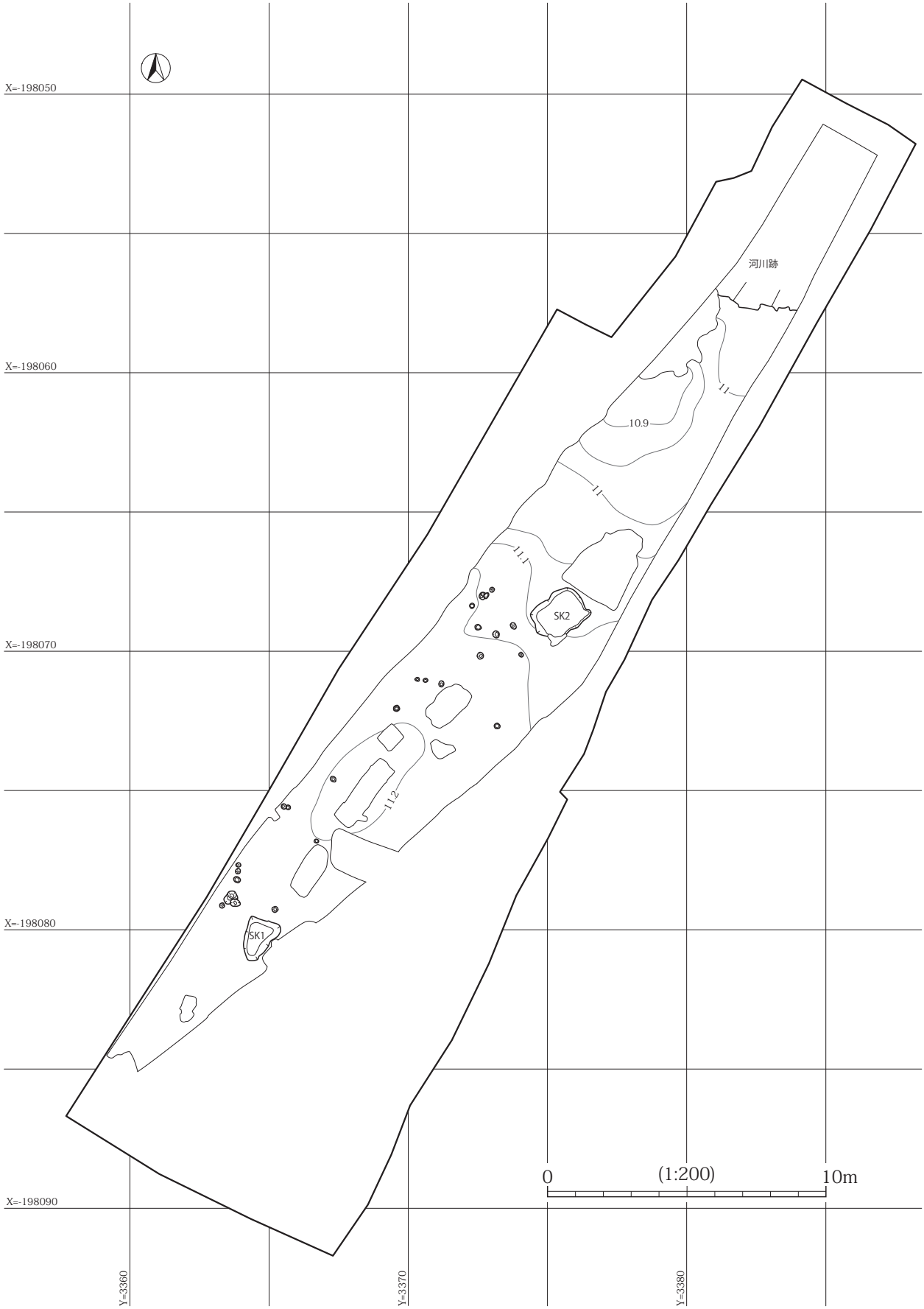
SK2 土坑 (第５図)　調査区の中央に位置する。平面形は不整長方形で、長軸方位は N-51°-E である。検出規模は長軸 200㎝、短軸 152㎝、深さ 7㎝である。断面形は浅い皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は起伏する。堆積土は単層である。遺物は底面から土師器小片が出土しているが、図示できる遺物はない。

2. ピット (第４図)

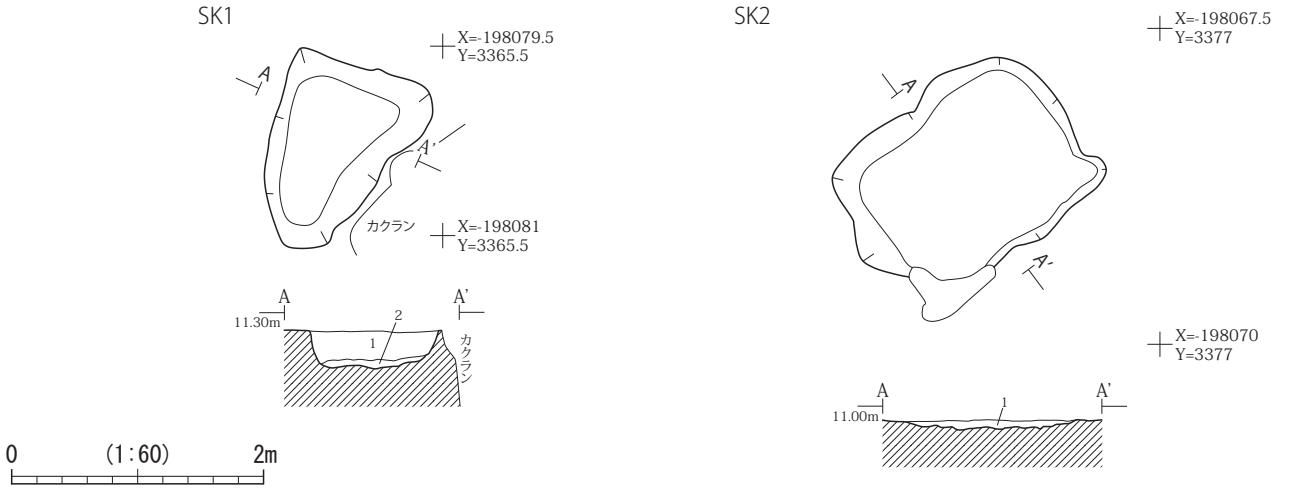
調査区中央部～南側で 25 基検出した。平面形は円形 14 基、楕円形 11 基で、断面形はいずれもＵ字形である。検出規模は、円形が直径 15 ～ 26㎝、深さ８～ 29㎝、楕円形が長軸 16 ～ 52㎝、短軸 12 ～ 24㎝、深さ８～ 44㎝である。堆積土は単層で、柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

3. 河川跡 (第３･４図)

調査区北側で、東流する河川跡の南肩の一部を検出した。調査は平面精査後に、調査区東壁に沿ってトレンチを設定し断面観察を行った。検出規模は東西 280㎝、南北 720㎝、深さ 170㎝である。底面は安全を考慮し、完掘していない。壁面は下位は内湾して立ち上がり、中位から上位は外傾して立ち上がる。堆積土は５層に分層された。１層は、2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂を基調とする現代の埋戻し土か堆積土かである。礫を多量に含み、グライ化する。２層は 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色砂を基調とし、2.5GY5/1 オリーブ灰色砂と互層をなす。粗砂と炭化物を微量、木根を多量に含み、グライ化する。３層は N4/0 灰色粘土質シルトを基調とし、酸化鉄を含む。砂と木根を少量含み、グライ化する。４層は 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂を基調とし、7.5GY4/2 灰オリーブ色砂と互層をなす。炭化物を微量に含み、グライ化する。５層は 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土を基調とし、基本層Ⅷ層・Ⅸ層ブロックを含み、グライ化する。遺物は出土していない。



第４図　Ⅳ層上面遺構配置図



遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (cm)
SK1	Ⅳ層	不整形	U 字形	N-20° -E	152 × 116 × 31
SK2	Ⅳ層	不整長方形	浅い皿形	N-51° -E	200 × 152 × 7

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK1	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。マンガン粒と酸化鉄を含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロックを含む。

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
ＳＫ２	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	褐色シルトブロックを多量に含む。マンガン粒を少量含む。酸化鉄と炭化物を微量含む。

第 5 図　Ⅳ層上面 SK1･2 土坑平面図・断面図

第 2 節　Ⅵ層上面検出遺構と出土遺物

本節ではⅥ層上面で検出した土坑 10 基、溝跡 11 条、性格不明遺構 2 基、ピット 30 基について報告する。遺物は、性格不明遺構 2 基から土師器小片が出土しているのみで図示できる遺物はない。

1. 土坑 (第 7･8 図)

SK3 土坑 (第 7 図)　調査区の南端に位置する。東側は撹乱に削平される。平面形は不整円形と考えられ、長軸方位は N-50° -E である。検出規模は径 161㎝、深さ 12㎝である。断面形は浅い U 字形で、壁面はやや内湾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

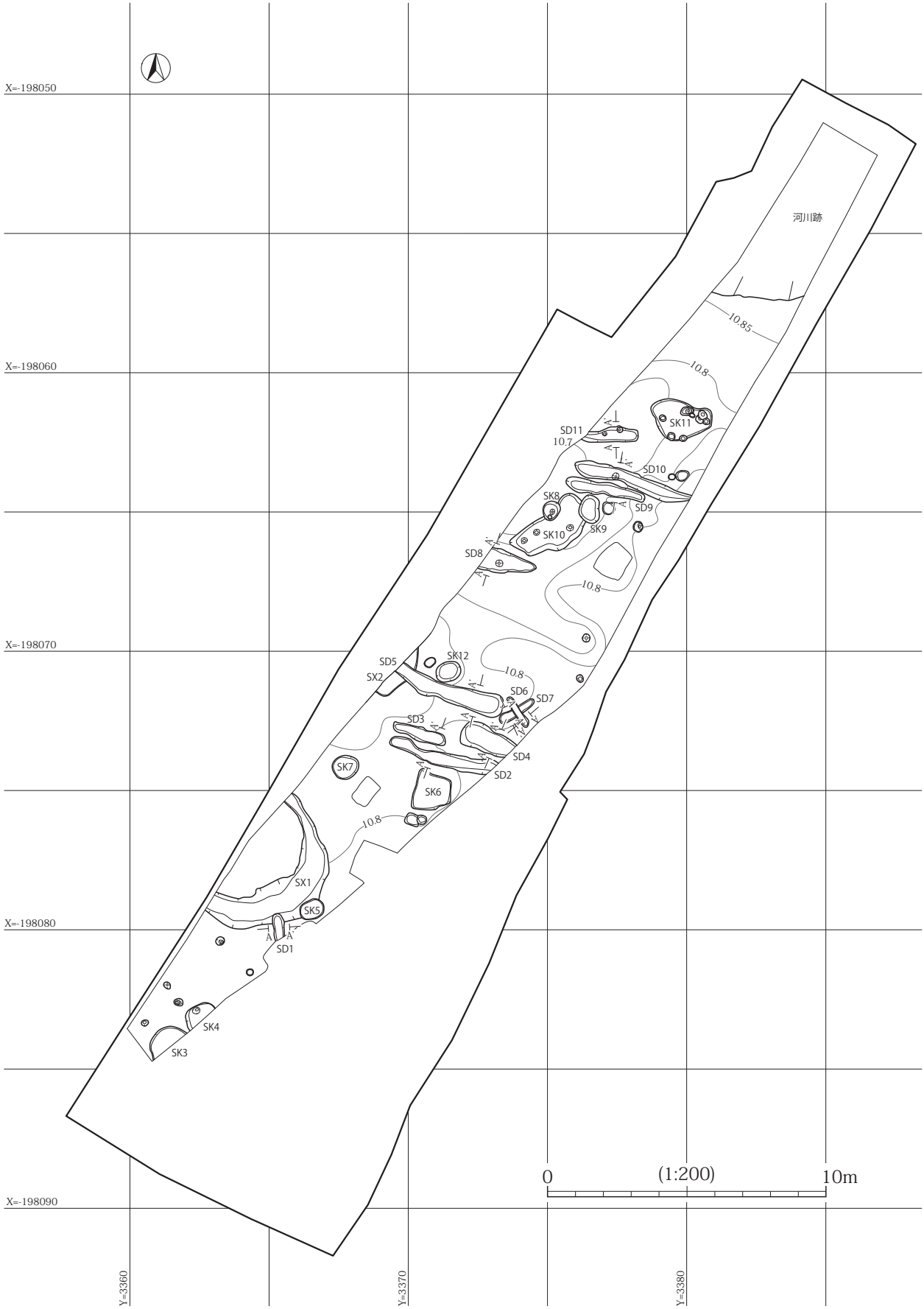
SK4 土坑 (第 7 図)　調査区の南端に位置する。東側は撹乱に削平される。平面形は円形と考えられる。検出規模は直径 115㎝、深さ 25㎝である。断面形は浅い U 字形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、西側にピット状の落ち込みがある。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK5 土坑 (第 7 図)　調査区の南側に位置する。SX1 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は楕円形で、長軸方位は N-65° -E である。検出規模は長軸 90㎝、短軸 68㎝、深さ 10㎝である。断面形は逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK6 土坑 (第 7 図)　調査区の中央やや南側に位置する。平面形は不整方形で、長軸方位は N-14° -E である。検出規模は長軸 148㎝、短軸 130㎝、深さ 13㎝である。断面形は逆台形で、壁面はやや内湾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK7 土坑 (第 7 図)　調査区の中央やや南側に位置する。平面形は円形である。検出規模は直径 94㎝、深さ 14㎝である。断面形は U 字形で､壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK8 土坑 (第 7 図)　調査区の中央に位置する。SK10、P56･57 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は円形である。検出規模は直径 71㎝、深さ 7㎝である。断面形は皿形で、壁面は緩やかに内湾して立ち上がる。底



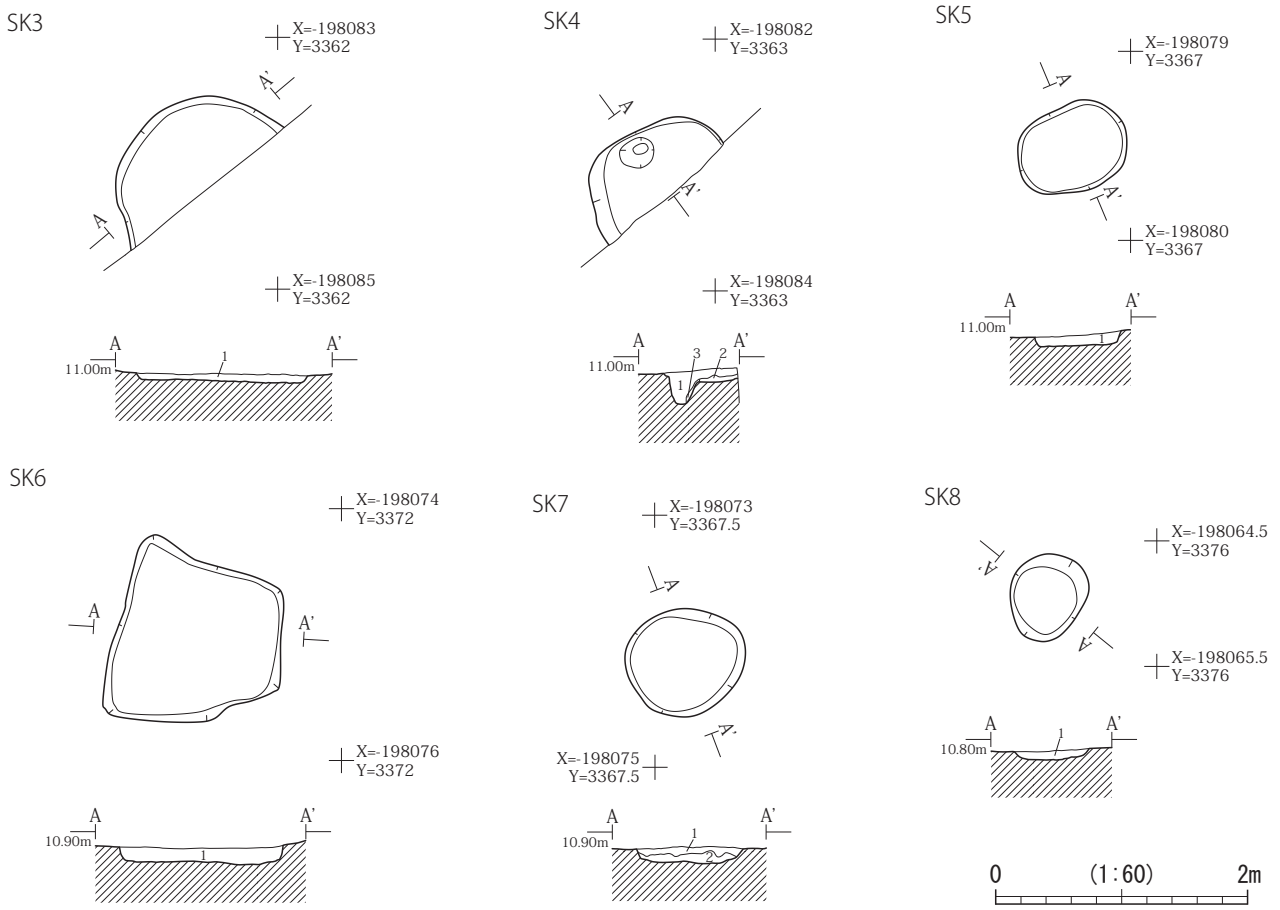
第 6 図　VI層上面遺構配置図

面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK9 土坑 (第 8 図)　調査区の中央に位置する。SK10 と重複関係にあり、本遺構が新しい。平面形は不整楕円形で、長軸方位はN -10° - Wである。検出規模は長軸 100㎝、短軸 70㎝、深さ 7㎝である。断面形は皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK10 土坑 (第 8 図)　調査区の中央に位置する。SK8･9、P54 ～ 56･58 と重複関係にあり、P54 ～ 56･58 より新しく、SK8･9 より古い。平面形は不整長方形で、長軸方位は N-55° -E である。検出規模は長軸 285㎝、短軸 137㎝、深さ 8㎝である。断面形は浅い皿型で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK11 土坑 (第 8 図)　調査区の中央北側に位置する。P43 ～ 48･51･52 と重複関係にあり、本遺構が古い。平面形は不整形で、長軸方位は N-83° -E である。検出規模は長軸 200㎝、短軸 150㎝、深さ 8㎝である。断面形は浅い逆台形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

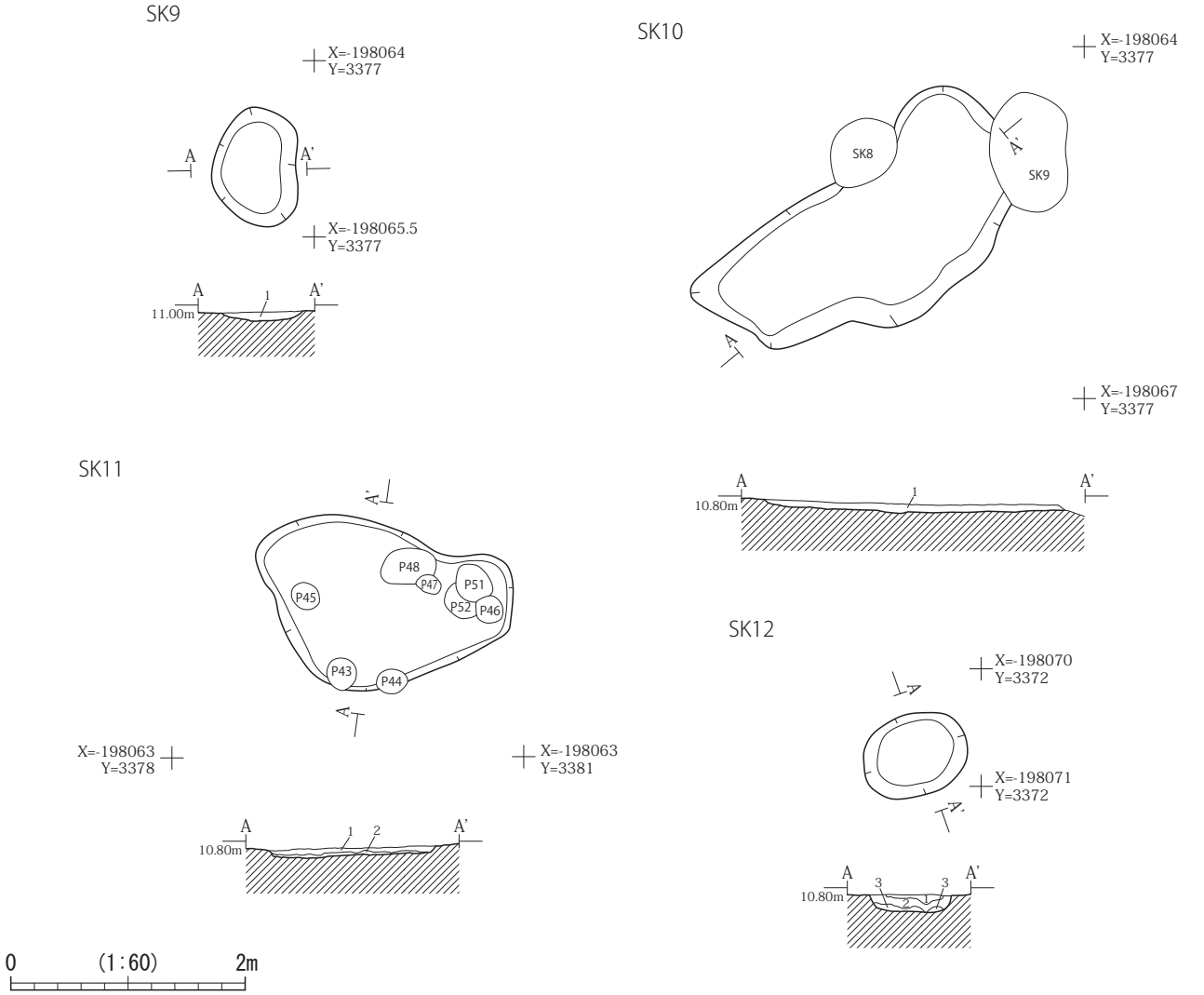


遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (㎝)
SK3	Ⅵ層	不整円形	浅い U 字形	N-50° -E	161 × (72) × 12
SK4	Ⅵ層	円形	浅い U 字形	-	115 × (62) × 25
SK5	Ⅵ層	楕円形	逆台形	N-65° -E	90 × 68 × 10
SK6	Ⅵ層	不整方形	逆台形	N-14° -E	148 × 130 × 13
SK7	Ⅵ層	円形	U 字形	-	94 × 85 × 14
SK8	Ⅵ層	円形	皿形	-	71 × 59 × 7

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK3	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	暗褐色シルト質粘土ブロックを多量に含む。酸化鉄を少量含む。
SK4	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土質シルトブロックを含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土小ブロックを少量含む。
SK5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	灰黄褐色シルト質粘土ブロックを多量に含む。酸化鉄を含む。
SK6	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。
SK7	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。酸化鉄を微量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。
SK8	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量に含む。

第 7 図　Ⅵ層上面 SK3 ～ 8 土坑平面図・断面図

SK12 土坑 (第 8 図)　調査区の中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸方位は N-73° -E である。検出規模は長軸 91㎝、短軸 70㎝、深さ 15㎝である。断面形は U 字形で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は 3 層に分層した。遺物は出土していない。



遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (cm)
SK9	Ⅵ層	不整楕円形	皿形	N-10° -W	100 × 70 × 7
SK10	Ⅵ層	不整長方形	浅い皿形	N-55° -E	285 × 137 × 8
SK11	Ⅵ層	不整形	浅い逆台形	N-83° -E	200 × 150 × 8
SK12	Ⅵ層	楕円形	U 字形	N-73° -E	91 × 70 × 15

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK9	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SK10	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土大ブロックとにぶい黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK11	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルト大ブロックを多量に含む。砂粒を含む。酸化鉄と炭化物を微量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを少量含む。酸化鉄を多量に含む。炭化物を微量含む。

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK12	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土小ブロックを少量含む。砂粒を含む。炭化物を微量含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土小ブロックと炭化物を少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	暗褐色粘土小ブロックを少量含む。

第 8 図　Ⅵ層上面 SK9 ～ 12 土坑平面図・断面図

2. 溝跡 (第 6･9 図)

SD1 溝跡 (第 6･9 図)　調査区南側に位置する。SX1 と重複関係にあり、本遺構が新しい。北端は調査区内で収束し、南側は撹乱に削平される。方向は N-8° -W で、検出規模は長さ 90㎝、幅 5㎝、深さ 8㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD2 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。西端は調査区内で収束し、東側は撹乱に削平される。方向は N-73° -W で、検出規模は長さ 381㎝、幅 56㎝、深さ 7㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

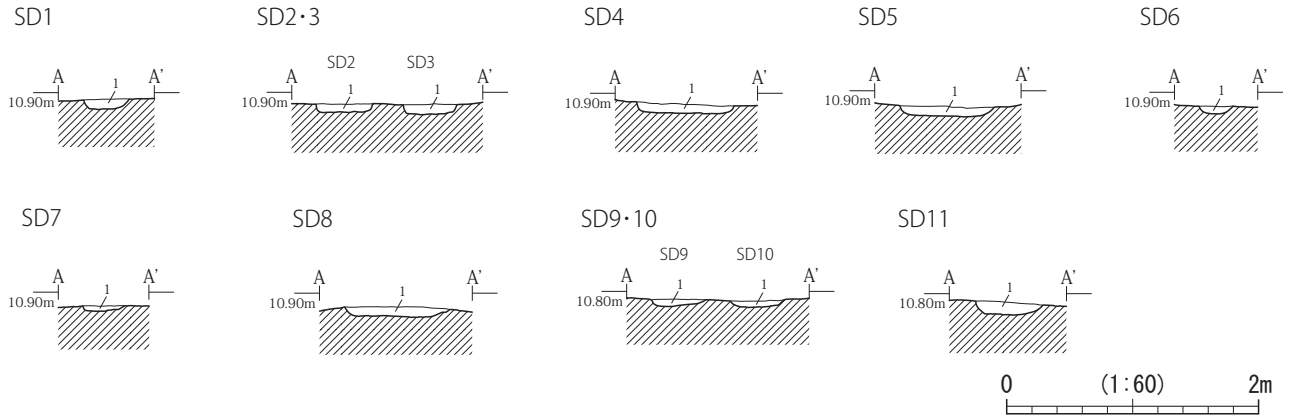
SD3 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。両端は調査区内で収束する。方向は N-72° -W で、検出規模は長さ 195㎝、幅 50㎝、深さ 9㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD4 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。西端は調査区内で収束し、東側は撹乱に削平される。方向は N-63° -W で、検出規模は長さ 190㎝、幅 95㎝、深さ 7㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD5 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。SX2 と重複関係にあり、本遺構が新しい。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向は N-67° -W で、検出規模は長さ 400㎝、幅 85㎝、深さ 10㎝である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD6 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。SD7 と重複関係にあり、本遺構が新しい。両端は調査区内で収束する。方向は N-34° -W で、検出規模は長さ 125㎝、幅 27㎝、深さ 5㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD7 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央に位置する。SD6 と重複関係にあり、本遺構が古い。両端は調査区内で収束する。方向は N-58° -E で、検出規模は長さ 143㎝、幅 37㎝、深さ 4㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。



遺構名	検出層位	形状	断面形	方位	長さ×幅×深さ (㎝)
SD1	Ⅵ層	直線	皿型	N-8° -W	(90) × 35 × 8
SD2	Ⅵ層	直線	皿形	N-73° -W	(381) × 56 × 7
SD3	Ⅵ層	直線	皿形	N-72° -W	195 × 50 × 9
SD4	Ⅵ層	直線	皿形	N-63° -W	(190) × 95 × 7
SD5	Ⅵ層	直線	皿形	N-67° -W	(400) × 85 × 10
SD6	Ⅵ層	直線	皿形	N-34° -W	125 × 27 × 5
SD7	Ⅵ層	直線	皿形	N-58° -E	143 × 37 × 4
SD8	Ⅵ層	直線	皿形	N-77° -W	(205) × 85 × 8
SD9	Ⅵ層	直線	皿形	N-77° -W	290 × 52 × 6
SD10	Ⅵ層	直線	皿形	N-69° -W	(430) × 63 × 6
SD11	Ⅵ層	直線	皿形	N-89° -W	(204) × 56 × 10

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SD1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物と酸化鉄を微量含む。
SD2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。
SD3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
SD4	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物と酸化鉄を微量含む。
SD5	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土代ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SD6	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量含む。

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SD7	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。酸化鉄を少量含む。炭化物を微量含む。
SD8	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SD9	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。炭化物を微量含む。
SD10	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。炭化物を微量含む。
SD11	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土大ブロックを少量含む。酸化鉄を含む。

第 9 図　Ⅵ層上面 SD1 ～ 11 溝跡断面図

SD8 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の中央やや北側に位置する。P53 と重複関係にあり、本遺構が古い。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向は N-77° -W で、検出規模は長さ 205㎝、幅 85㎝、深さ 8㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

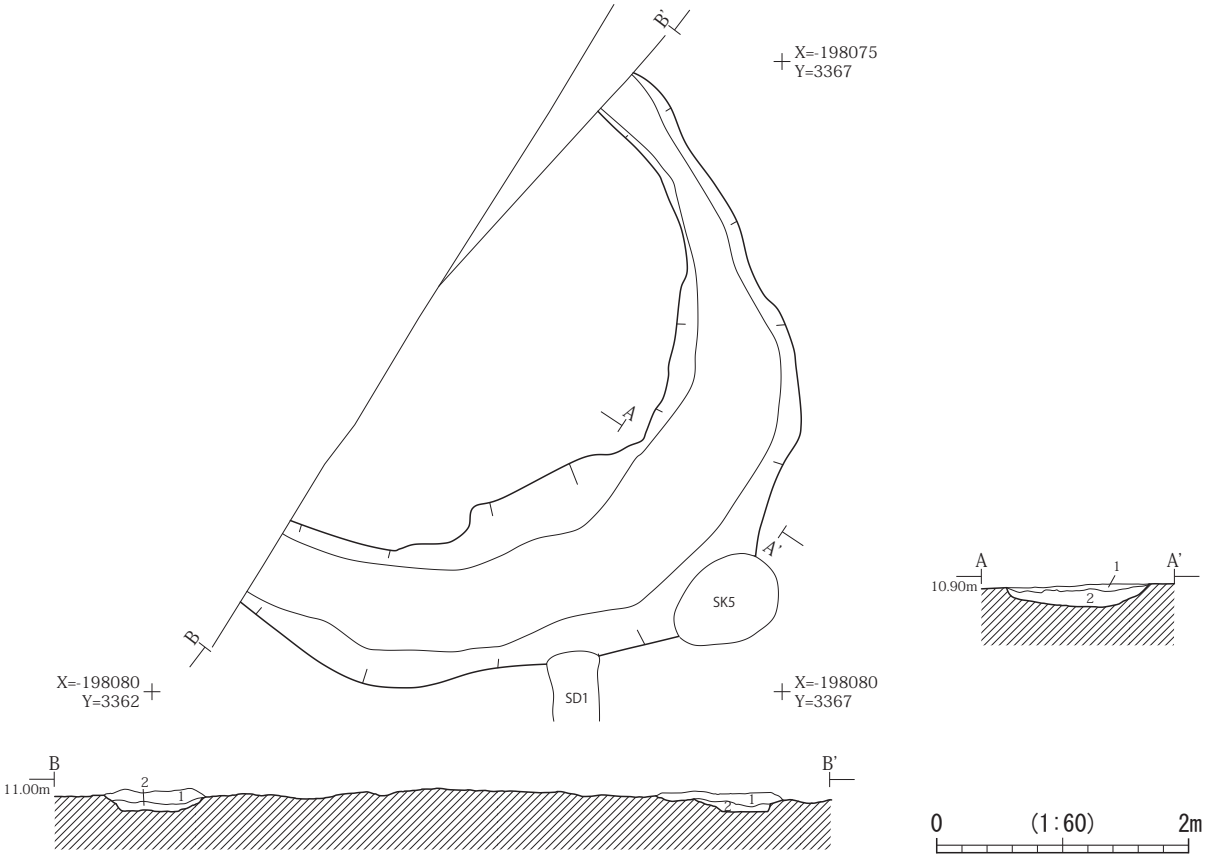
SD9 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の北側に位置する。両端は調査区内で収束する。方向は N-77° -W で、検出規模は長さ 290㎝、幅 52㎝、深さ 6㎝である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD10 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の北側に位置する。P59 と重複し、本遺構が新しい。西端は調査区内で収束し、東側は調査区外へ延びる。方向は N-69° -W で、検出規模は長さ 430㎝、幅 63㎝、深さ 6㎝である。断面形は皿型で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD11 溝跡 (第 6･9 図)　調査区の北側に位置する。P49 と重複関係にあり、本遺構が古い。東端は調査区内で収束し、西側は調査区外へ延びる。方向は N-89° -W で、検出規模は長さ 204㎝、幅 56㎝、深さ 10㎝である。断面形は皿形で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

3. 性格不明遺構 (第 10 図)

SX1 性格不明遺構 (第 10 図)　調査区の南側に位置する。SK5、SD1 と重複関係にあり、本遺構が古い。円弧状に溝がめぐる平面形で、西側は調査区外へ延びる。検出規模は外径 524㎝、内径 405㎝、溝幅 32 ～ 162㎝、深さ 5 ～ 24㎝である。溝の北側部分は、東側、南側と比べて幅は狭く、浅くなる。断面形は U 字形で、壁面は外



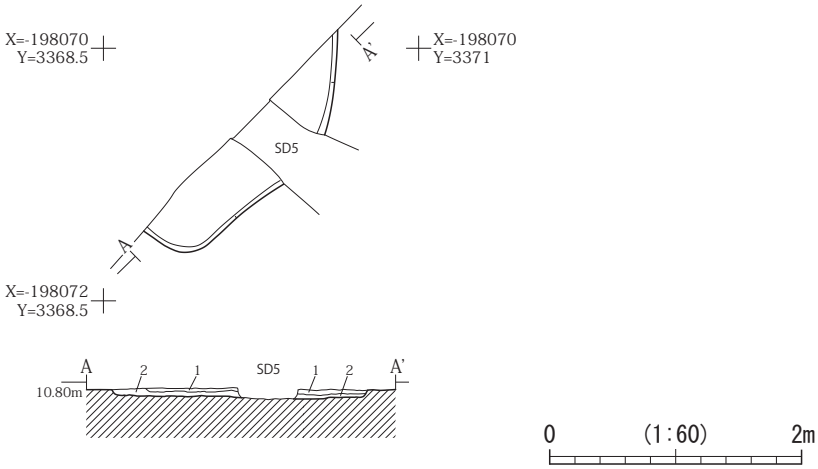
遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸　幅×深さ (cm)
SX1	Ⅵ層	円形	U 字形	-	524 × (325)　32 ～ 162 × 5 ～ 24

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SX1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。褐灰色粘土大ブロックと砂粒を少量含む。炭化物を微量含む。
SX1	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土小ブロックを少量含む。酸化鉄を含む。炭化物を微量含む。

第 10 図　Ⅵ層上面 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

傾して立ち上がる。堆積土は 2 層に分層した。溝の内側には付属する遺構もなく、整地なども行われていない。遺物は土師器小片が出土しているが、図示できる遺物はない。

SX2 性格不明遺構 (第 10 図)　調査区の中央に位置する。SD5 と重複関係にあり、本遺構が古い。西側は調査区外へ続く。平面形は不整形と考えられる。長軸方位は N-44° -E である。検出規模は長軸 230㎝、短軸 50㎝、深さ 7㎝である。断面形は浅い U 字形で、壁面は外傾して立ち上がる。堆積土は 2 層に分層した。。遺物は出土していない。



遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (㎝)
SX2	Ⅵ層	不整形と考えられる。	浅い U 字形	N-44° -E	(230) × (50) × 7

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考	遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SX2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。砂粒を多量に含む。酸化鉄と炭化物を含む。	SX2	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。炭化物を微量含む。

第 11 図　Ⅵ層上面 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

4. ピット (第 6 図)

調査区全体で 30 基検出した。平面形は円形が 20 基、楕円形が 9 基、隅丸長方形が 1 基である。断面形は U 字形が 26 基、皿形が 3 基、浅い皿型が 1 基である。検出規模は円形が直径 18 ～ 47㎝、深さ 4 ～ 27㎝、楕円形が長軸 20 ～ 48㎝、短軸 15 ～ 31㎝、深さ 7 ～ 28㎝、隅丸長方形が長軸 54㎝、短軸 43㎝、深さ 13㎝である。堆積土はいずれも単層で、柱痕跡は検出していない。遺物は出土していない。

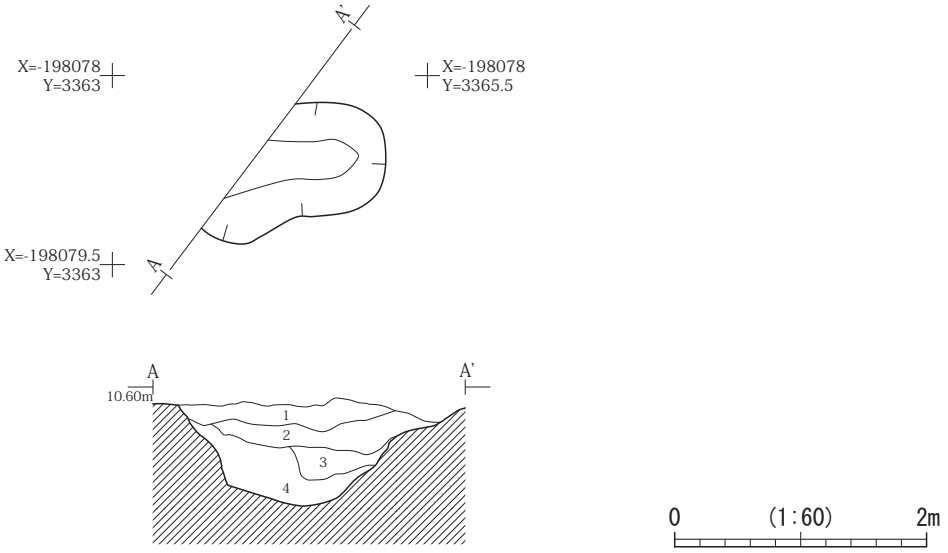
第 3 節　X 層上面遺構と出土遺物

XⅤ層上面で検出した土坑 1 基が、調査区西壁の断面観察でX層より掘り込まれていることを確認したため、X 層上面遺構として報告する。

1. 土坑 (第 12･13 図)

SK13 土坑 (第 12･13 図)　調査区の南側に位置する。西側は調査区外へ延びる。平面形は不整楕円形と考えられる。長軸方位は N-85° -E である。検出規模は長軸 112㎝、短軸 89㎝、壁面で確認した深さ 85㎝である。断面形は U 字形で、壁面は下部は外傾して立ち上がり、中位で屈曲し、上部は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は 4 層に分層した。遺物は縄文土器が出土しており、そのうち 1 点を図示した。

第 13 図 1 は注口土器である。器形は浅鉢型で、頸部が屈曲して口縁部は大きく内傾し、波状口縁と考えられる。口縁部下半～頸部に半裁された円筒状の貼付がなされ、注口としている。口縁頂部から垂下する把手が成形され、頸部～胴部上端に貼付けられている。文様は、口縁部には沈線が、胴部には条線文が用いられている。

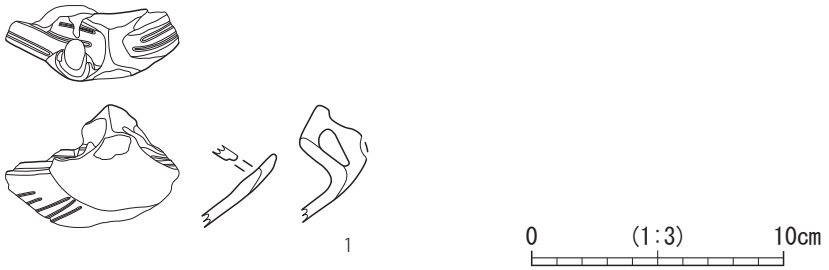


遺構名	検出層位	平面形	断面形	長軸方位	長軸×短軸×深さ (cm)
SK13	X層	不整楕円形と考えられる。	U字形	N-85°-E	(112) × 89 × 85

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK13	1	10YR4/4 褐色	砂	にぶい黄褐色粘土質シルト小ブロックと小礫を多量に含む。酸化鉄を少量含む。炭化物を微量含む。
	2	10 Y R 3/3 暗褐色	シルト質粘土	灰黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。砂粒を含む。礫を炭化物を微量含む。

遺構名	層位	土　色	土　性	備　　考
SK13	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色粘土大ブロックを多量に含む。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土小ブロックを多量に含む。

第 12 図　X層 SK13 土坑平面図・断面図



No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	口径×底径×器高 (cm)	文様等	備　考	写真図版
1	A-001	SK13	堆積土	縄文土器	注口土器	―×―×（4.9）	口縁部：橋状把手、沈線　胴部：条線文	摩滅顕著	3-1

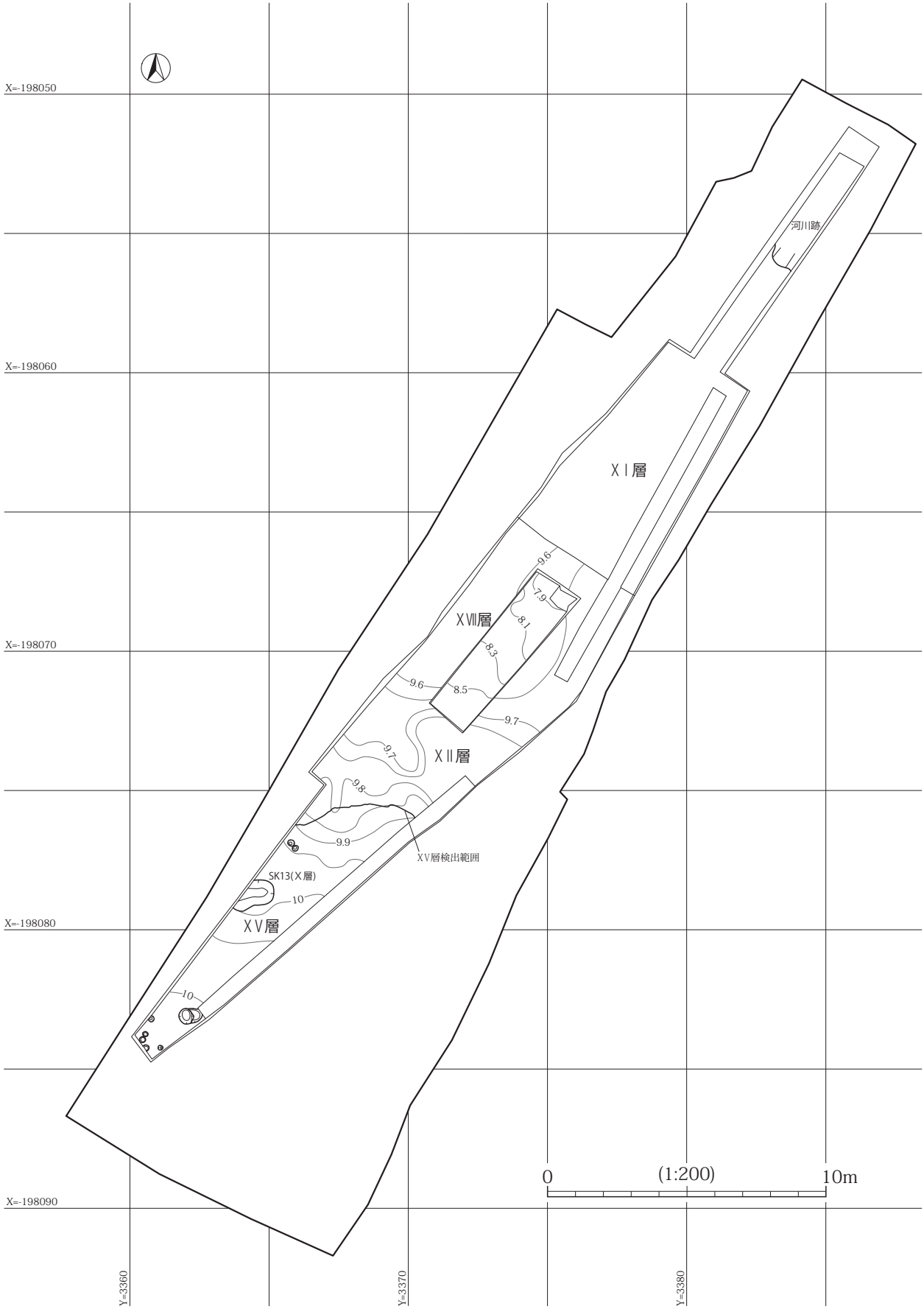
第 13 図　X層 SK13 土坑出土遺物

第 4 節　XV層上面検出遺構と出土遺物

本節では、XV層上面で検出したピット 9 基について報告する。

1. ピット (第 14 図)

調査区南側のXV層上面で 9 基検出した。平面形は円形が 8 基、楕円形が 1 基である。断面形は U 字形が 8 基、皿型が 1 基である。検出規模は円形が直径 18 ～ 56㎝、深さ 11 ～ 29㎝、楕円形が長軸 50㎝以上、短軸 52㎝、深さ 14㎝である。このうち、P64 では柱痕跡を検出した。堆積土は P64 を除き単層である。遺物は出土していない。



第 14 図　XⅤ層上面遺構配置図

第５節　包含層出土遺物

本節では遺物包含層である基本層XⅡ層・XⅢ層・XV層出土遺物について報告する。

基本層XV層は、調査区の南側でXⅠ層の下面で確認した。調査区の中央部ではXⅠ層の下面でXⅡ層を確認し、XⅡ層の下面でXⅢ層を確認している。XV層は確認されなかった。XV層はａ～ｃ層に細別され、このうちXVａ層とXVｂ層は縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。また、XⅡ層とXⅢ層も、縄文時代後期の遺物を含む遺物包含層である。今回確認した範囲は、北側の笊川に向かって傾斜する地形であったと考えられる。

遺物は、XⅡ層・XⅢ層からは縄文土器、土製品、石器が出土し、XV層からは縄文土器、石器が出土している。遺物の出土量は、XⅡ層は比較的まとまって出土しているのに対し、XⅢ層とXV層は分布がまばらで小片が多い。また、XⅡ層・XⅢ層の遺物はXV層に近接する地点で多く出土している。

包含層出土遺物のうち、器形や文様等に特徴がみられる土器と土製品、石器について報告する。

1.XⅡ層出土遺物 (第 15・16 図)

XⅡ層からは縄文土器、土製品、石器が出土しており、縄文土器 22 点、土製品 5 点、磨製石器 1 点を図示した。縄文土器は深鉢が 22 点である。

深鉢のうち、第 15 図 2 ～ 12、第 16 図 1 ～ 3 は口縁部である。第 15 図 5・7・12、第 16 図 1 は波状口縁である。口縁部は直立気味もしくはやや外傾するものが多い。第 15 図 7 の口縁部は大きく外反し、第 15 図 1・5・6・12 は内傾する。第 15 図 1 の胴部下半は外傾して開き、口縁部～胴部上半はやや内傾する。底部に網代痕をもつ。第 15 図 2 は環状突起を有するとみられる。口縁部文様は、隆線を施したもの（第 15 図 10）、沈線を施したもの（第 15 図 4・8・11）、円形の刺突を施したもの（第 15 図 12）、沈線及び円形の刺突を施したもの（第 15 図 3・7）、I 字状孔隆沈線文を施したもの（第 15 図 2・9）と、口縁部に文様帯をもたず地文を施したもの（第 15 図 1・5、第 16 図 1 ～ 3）がある。胴部文様は、条線文（第 15 図 1・5・6・12）、網目状撚糸文（第 15 図 4、第 16 図 1・2）、LR 縄文（第 15 図 2・10）、RL 縄文（第 15 図 8）、L 縄文（第 15 図 11、第 16 図 3）がある。第 15 図 10 ～ 12 は地文の上に沈線を施しており、10・11 は沈線による区画内を磨消している。第 15 図 12 は渦状沈線を施していると思われる。第 15 図 2 は I 字状孔隆沈線文直下の円形刺突を起点とした対称弧線文を施している。

第 16 図 4 ～ 10 は胴部である。地文は LR 縄文が大半で、第 16 図 7・9 は撚糸文である。第 16 図 4・7・8・10 は地文の上に沈線を施している。第 16 図 7 は沈線上に輪形隆文を施している。第 16 図 5・6 は隆線を施しており、ともに鎖状隆線文となっている。磨消は第 16 図 4・6・8・10 でみられ、沈線または隆線で区画された内側を磨消していると思われる。第 16 図 9 は頸部に隆帯をもち、隆帯上及びその直下に棒状施文具による連続刺突文を施している。第 16 図 10 は胴部に膨らみをもつとみられ、LR 縄文を施したのちに渦状の沈線文を施文している。

土製品 5 点は土器片を利用した土製円盤である。LR 縄文または沈線が施され、第 16 図 11 は一部周縁を研磨している。

磨製石器は磨製石斧である。上半部が欠損しており、刃部には使用によるものとみられる欠損箇所がある。

2. XⅢ層出土遺物 (第 17 図)

XⅢ層からは縄文土器、石器が出土しており、そのうち縄文土器 6 点、打製石器 1 点、礫石器 2 点を図示した。縄文土器は深鉢が 6 点である。

深鉢のうち 1 ～ 3 は口縁部である。1 の口縁部は直立気味で、2 は外反し、3 は内傾する。口縁部文様は、連続刺突列を施したもの（3)、口縁部文様帯をもたず地文を施したもの（1）がある。2 は頸部に把手をもち、連続刺突列を伴う隆線を施している。胴部文様は網目状撚糸文（1)、撚糸文（2）がある。

4・5・6 は胴部である。地文は LR 縄文で、4 は結節縄文、6 は羽状縄文とみられる。5 は頸部に沈線が施され、沈線上に円形刺突をもつ。頸部断面の接合面には刻目が見られる。胴部には円形刺突を起点として、対称弧線間磨消文と蛇行沈線文が交互に施されている。6 は沈線で区画された内部を磨消している。

打製石器（9）は亜円礫を素材とした石核である。打面は固定で、入念な打面調整の痕跡がみられる。剥片は礫を一周するように採取されており、剥片は短く、規則的な形状とみられる。

礫石器は、8 は磨石、7 は軽石製石製品である。8 は裏面に磨面をもち、裏面中央部及び側面の一部に敲打痕がみられる。7 は表面中央部に凹みがみられる。

3. XⅤ層出土遺物 (第 18・19 図)

XⅤ層からは縄文土器、土製品、石器が出土しており、縄文土器 9 点、土製品 2 点、打製石器 1 点、礫石器 1 点を図示した。縄文土器のうち、深鉢が 7 点、鉢が 2 点である。

深鉢のうち、第 18 図 1 ～ 5 は口縁部である。5 の口縁部はやや外傾し、1・3 は内傾、2・4 は外反する。口縁部文様は、沈線を施すもの（2 ～ 4)、沈線及び円形刺突を施すもの（5)、隆線文と刺突文、その周囲に沈線を施すもの（1）がある。3 は口縁部内面に沈線及び刺突を施している。4 は内面に隆沈線を施している。胴部文様は、5 はに LR 縄文である。4 は隆沈線による区画をもち、隆線の交点には円形の刺突を施している。区画内には隆沈線に沿うように連続する半裁竹管文を施している。胎土に金雲母を含む。

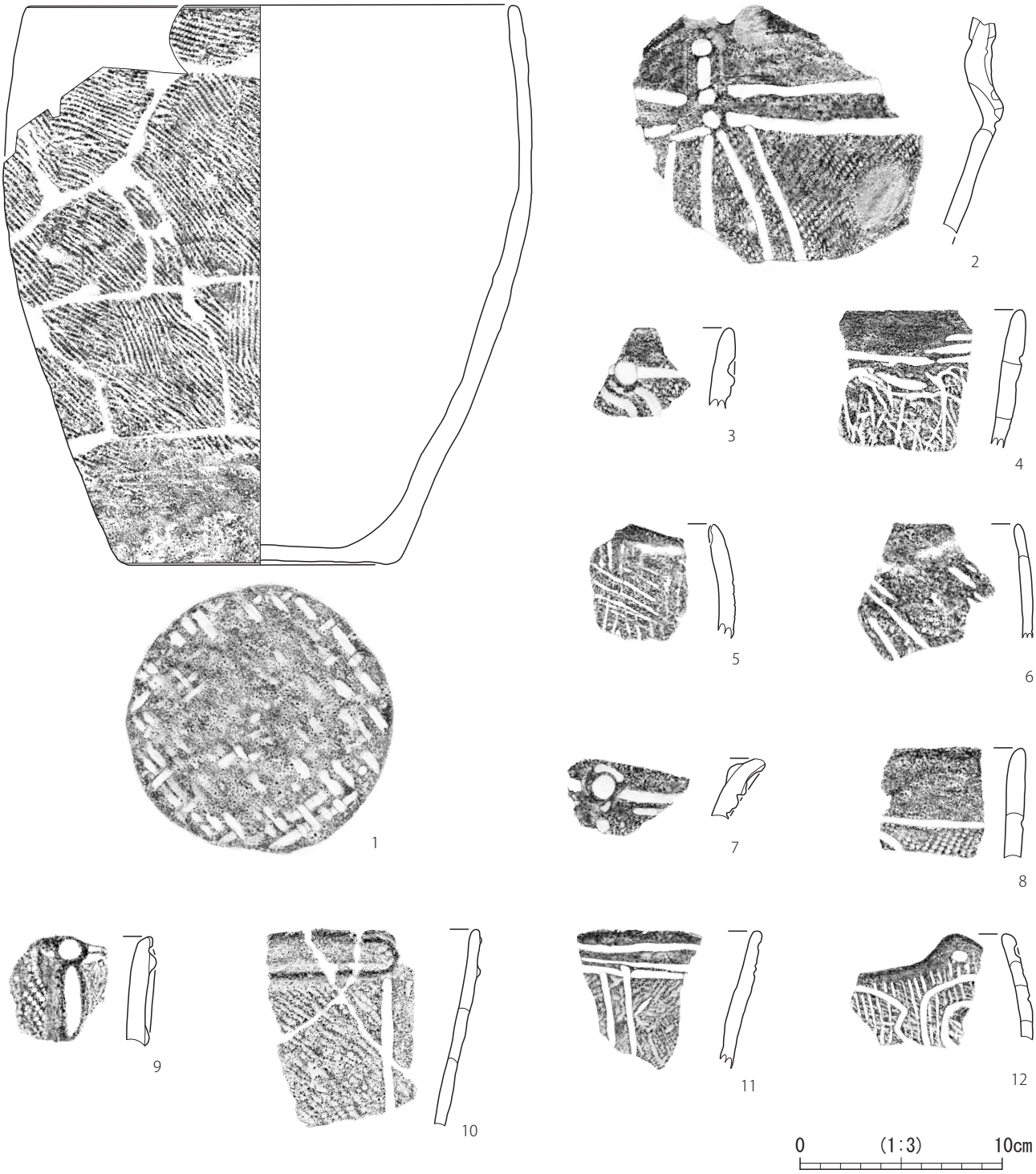
第 18 図 6・7 は胴部である。6 は地文に LR 縄文を用い、垂下沈線（直線と蛇行）を施している。7 は頸部及び胴部に LR 縄文を施し、地文の上に沈線を施している。

第 18 図 8 は鉢形土器の口縁部である。口縁～胴部が内傾する。地文は撚糸文である。地文の上に直線及び弧状の沈線と、盲孔を施している。

土製品 2 点は土器片を利用した土製円盤である。文様は、第 18 図 10 は RL 縄文、第 18 図 11 は磨滅により不明である。

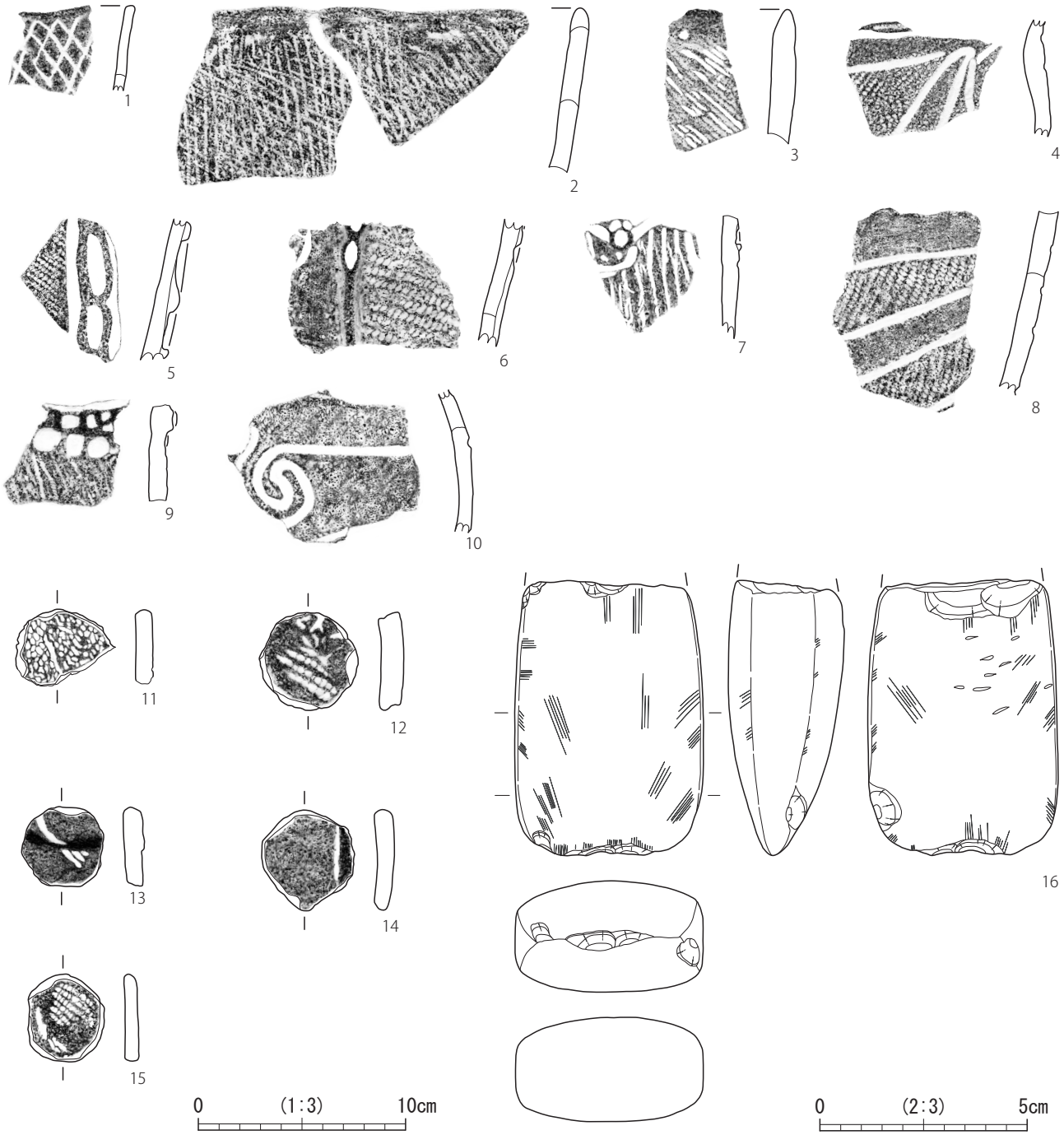
剥片 (第 19 図 1) は、背面に自然面をもち、小型の剥片を採取した後に剥離したものとみられる。末端に使用による刃こぼれがみられる。

第 18 図 12 の礫石器は、表裏両面に磨り及び敲打による凹みがみられ、下部に若干の敲打痕がみられる。



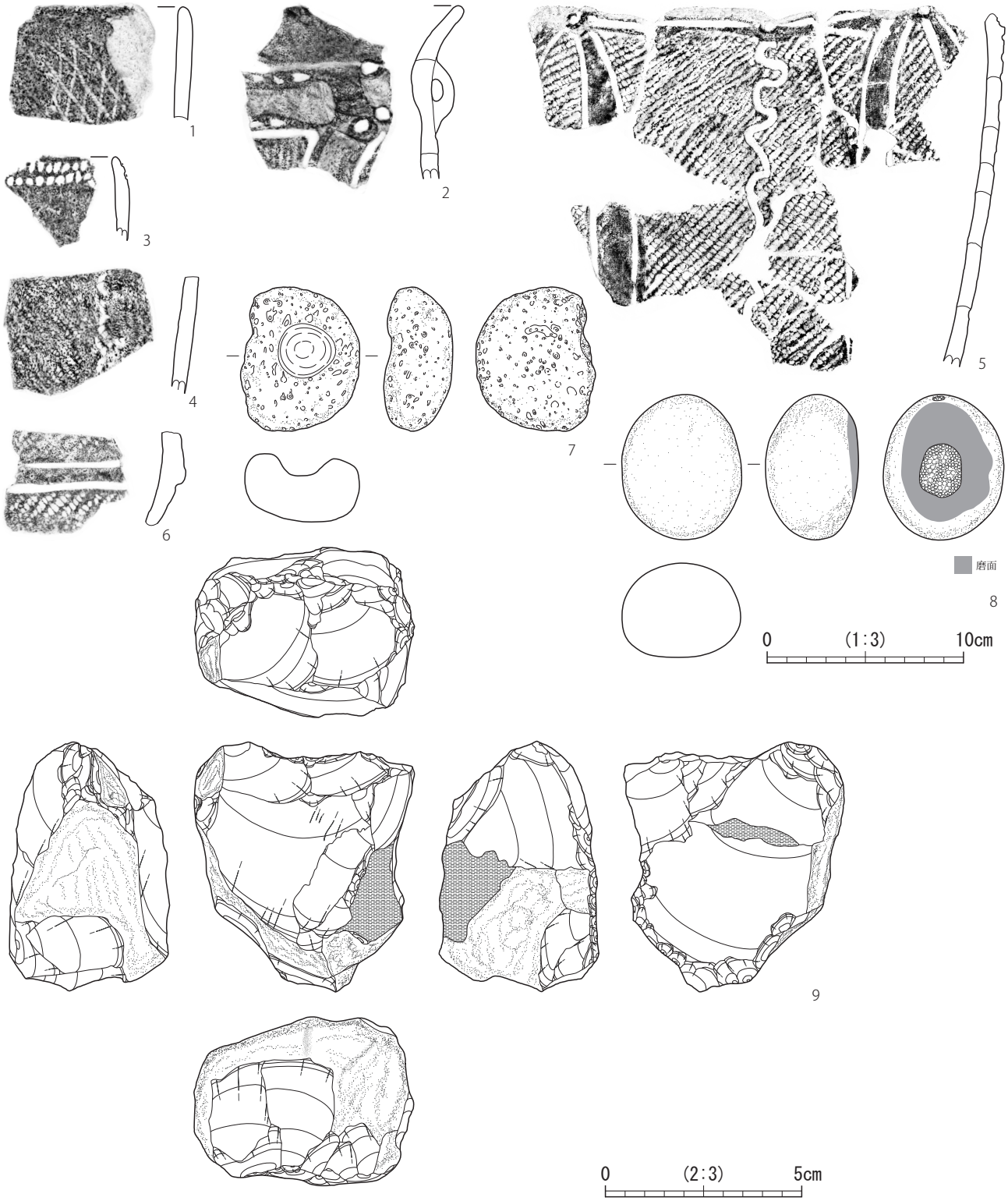
No.	登録番号	基本層序	出土位置	種　別	器　種	口径×底径×器高 (cm)	文様等	備　考	写真図版
1	A-002	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	(24.0) × 15.0 × 27.6	胴部：条線文　底部：網代痕	口径は復元値	3-8
2	A-003	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（10.7）	口唇部：環状突起？　口縁部：Ｉ字状孔隆沈線文　胴部：ＬＲ縄文、対称弧線文	摩滅	3-4
3	A-006	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（4.0）	ＬＲ縄文、沈線、盲孔		3-3
4	A-007	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（6.8）	口縁部：沈線　胴部：網目状撚糸文、沈線		3-2
5	A-009	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.7）	波状口縁　胴部：条線文	摩滅	3-5
6	A-010	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.6）	条線文？	摩滅顕著	3-6
7	A-011	XII 層	中央	縄文土器	深鉢？	—×—×（3.0）	波状口縁？　外面：沈線、輪形隆文、縦位刺突列　内面：隆線		3-7
8	A-012	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.4）	ＲＬ縄文（縦）、沈線	摩滅	3-9
9	A-018	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.3）	隆線、ＬＲ縄文？、Ｉ字状孔隆沈線文	摩滅	3-10
10	A-019	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（9.7）	口縁部:隆線、逆Ｃ字状隆起線文　胴部:ＬＲ縄文（縦）？、沈線、摩消	摩滅	3-11
11	A-021	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	（39.2）×—×（6.8）	口縁部：沈線　胴部：Ｌ縄文？、沈線、沈線間摩消	摩滅	3-12
12	A-022	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.2）	口縁部:山形突起、盲孔　胴部:条線文、沈線（不整渦状沈線？）		3-13

第 15 図　XII 層遺物包含層出土遺物 (1)



No.	登録番号	基本層序	出土位置	種　別	器　種	口径×底径×器高 (cm)	文様等	備　考	写真図版
1	A-023	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（4.1）	波状口縁　胴部：網目状撚糸文	摩滅	3-14
2	A-026	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（7.9）	網目状撚糸文	摩滅	3-16
3	A-030	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（6.5）	L 縄文（縦）		3-15
4	A-004	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.6）	L R 縄文、沈線、沈線区画内摩消	摩滅	3-17
5	A-005	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（6.9）	L R 縄文（縦）、鎖状隆線文、沈線		3-18
6	A-008	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（6.1）	L R 縄文（縦）、鎖状隆線文、沈線、摩消	摩滅	3-19
7	A-013	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.6）	撚糸文、沈線、輪形隆文		3-21
8	A-028	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（8.8）	LR 縄文、沈線区画、区画内摩消	摩滅	3-20
9	A-029	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（4.6）	頸部：隆帯、棒状施文具による連続刺突列　胴部：撚糸文	摩滅	3-22
10	A-024	XII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（6.9）	L R 縄文、渦状沈線文、摩消	摩滅	3-28
No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	文様等	備　考	写真図版
11	P-001	XII 層	中央	土製品	土製円盤	(3.6) × 4.8 × 0.8　14.9	L R 縄文、周縁一部研摩		3-23
12	P-002	XII 層	中央	土製品	土製円盤	4.7 × 4.8 × 1.1　30.5	L R 縄文	摩滅	3-24
13	P-003	XII 層	中央	土製品	土製円盤	3.8 × 3.9 × 1.0　17.9	隆線、沈線？	摩滅	3-25
14	P-004	XII 層	中央	土製品	土製円盤	4.8 × 4.4 × 0.9　21.9	隆線	摩滅顕著	3-26
15	P-005	XII 層	中央	土製品	土製円盤	4.2 × 3.6 × 0.6　13.1	L R 縄文	摩滅顕著	3-27
No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	石　材	備　考	写真図版
16	Kb-001	XII 層	中央	磨製石器	磨製石斧	（6.6）× 4.5 × 2.8　150.1	蛇紋岩	上部欠損、刃部に使用による欠損	4-1

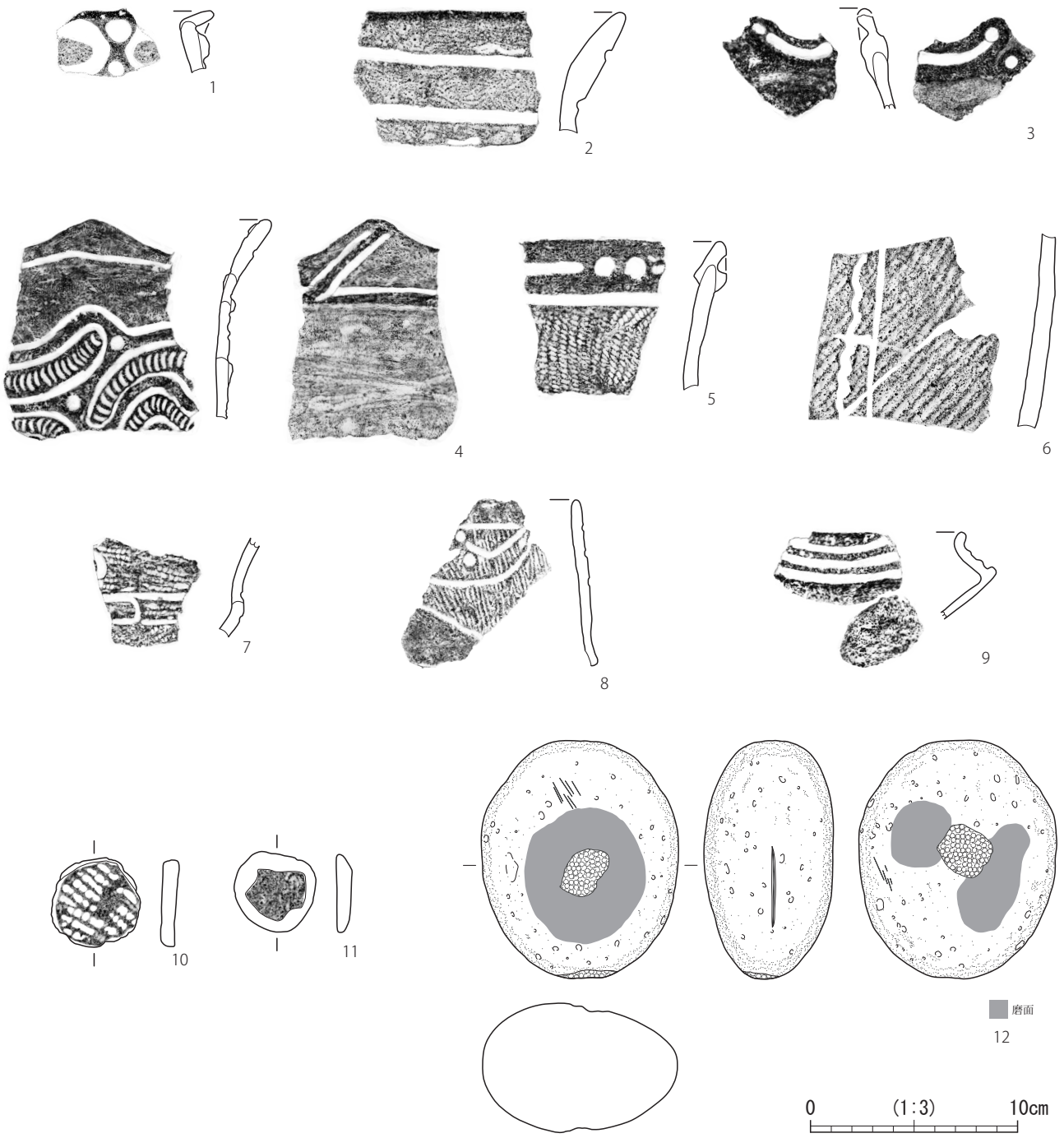
第 16 図　XII 層遺物包含層出土遺物 (2)



No.	登録番号	基本層序	出土位置	種　別	器　種	口径×底径×器高 (cm)	文様等	備　考	写真図版
1	A-041	XIII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.8）	網目状撚糸文	摩滅	3-29
2	A-042	XIII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（8.8）	頸部：隆線、連続刺突文、把手　胴部：撚糸文、隆沈線、摩消	摩滅	3-30
3	A-044	XIII 層	中央	縄文土器	深鉢？	—×—×（3.6）	連続刺突列		3-31
4	A-043	XIII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（5.9）	LR 結節縄文（縦）	摩滅	3-32
5	A-040	XIII 層・XV 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（18.0）	頸部：沈線、盲孔　胴部：ＬＲ縄文、縦位蛇行沈線文、対称弧線間摩消文	頸部断面輪積に刻み目あり	4-2
6	A-045	XIII 層	中央	縄文土器	深鉢	—×—×（4.6）	羽状縄文、沈線、内部摩消		3-33

No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	石　材	備　考	写真図版
7	Kc-003	XIII 層	中央	礫石器器	軽石製石製品	7.3 × 6.0 × 3.6　17.8	軽石	表面：中央部に凹み	4-7
8	Kc-002	XIII 層	中央	礫石器	磨石	7.4 × 6.0 × 4.7　282.2	安山岩	裏面：スリ、弱いタタキ　側面：タタキ	4-6
9	Ka-002	XIII 層	中央	打製石器	石核	6.3 × 5.6 × 4.1　174.7	頁岩	一周するように剥片剥離、打面調整痕	4-5

第 17 図　XⅢ層遺物包含層出土遺物

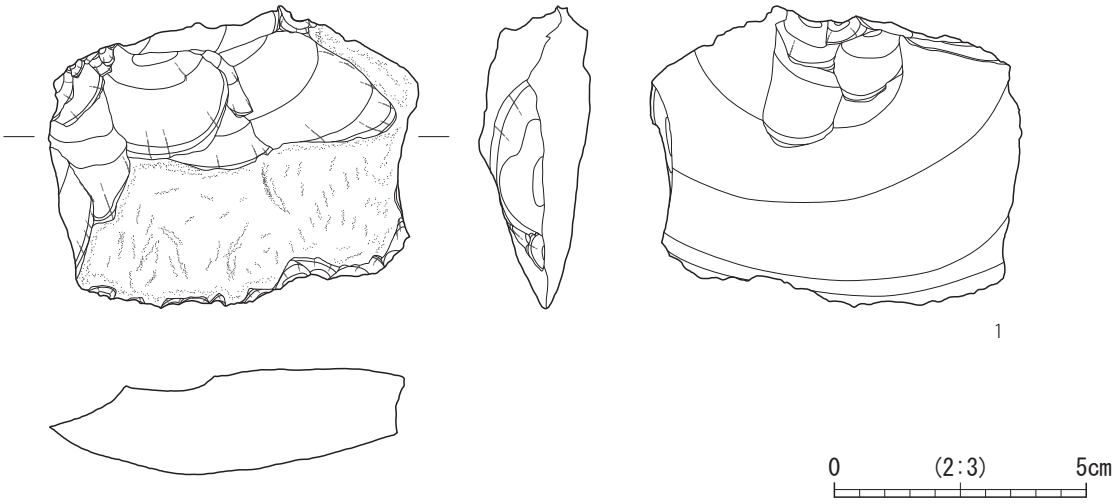


No.	登録番号	基本層序	出土位置	種　別	器　種	口径×底径×器高 (cm)	文様等	備　考	写真図版
1	A-031	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（3.0）	隆線文、刺突文、沈線		4-3
2	A-034	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（5.8）	沈線	摩滅	4-8
3	A-035	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（4.8）	外面：山形突起、沈線　内面：隆沈線、刺突		4-4
4	A-036	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（9.6）	波状口縁　口縁部（外）：沈線　口縁（内）：隆沈線（斜行）　頸部（外）：無文帯　頸部（内）：隆沈線　胴部：隆沈線、刺突、隆沈線区画内に半裁竹管による連続刺突列		4-9
5	A-039	XIII 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（7.2）	口縁部：盲孔、沈線　胴部：LR 縄文		4-10
6	A-037	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（9.3）	ＬＲ縄文、垂下沈線（直線＋蛇行）	摩滅	4-12
7	A-032	XV 層	南側	縄文土器	深鉢	—×—×（5.0）	ＬＲ縄文、沈線	摩滅	4-11
8	A-033	XV 層	南側	縄文土器	鉢	—×—×（7.9）	撚糸文、盲孔、沈線	摩滅	4-13
9	A-038	XV 層	南側	縄文土器	鉢	—×—×（4.2）	口縁部：沈線	摩滅顕著	4-14

No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	文様等	備　考	写真図版
10	P-006	XV 層	南側	土製品	土製円盤	4.2 × 4.2 × 0.8　15.9	ＲＬ縄文	摩滅	4-15
11	P-007	XV 層	南側	土製品	土製円盤	3.8 × 3.9 × 0.8　12.3	不明、周縁摩滅	摩滅顕著	4-16

No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	石　材	備　考	写真図版
12	Kc-001	XV 層	南側	礫石器	凹石	11.5 × 9.5 × 6.2　795.3	安山岩	両面中央部にタタキによる凹み、その周辺にミガキ、下部に若干のタタキ痕	4-18

第 18 図　XV 層遺物包含層出土遺物（1）



No.	登録番号	遺構名	層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ (cm)　重量 (g)	石　材	備　考	写真図版
1	Ka-001	XV 層	南側	打製石器	剥片	5.9 × 7.3 × 2.1　84.6	安山岩	背面に自然面、縁辺に刃こぼれあり	4-17

第 19 図　XV層遺物包含層出土遺物（2）

第 6 章　まとめ

1　六反田遺跡は仙台市南部、広瀬川と名取川にはさまれた沖積地である郡山低地の南部に所在し、北側を東流する名取川の支流である笊川の自然堤防上に立地する。標高は、現況で約 12m である。今回の調査区は昭和 57・61 年度に実施した仙台市地下鉄南北線建設工事に伴う発掘調査の調査区Ⅰ・Ⅲ区に挟まれた地区である。

2　今回の調査では、縄文時代後期と古墳時代後期～平安時代と考えられる遺構を検出した。また、遺物は縄文時代後期の土器・石器、古代の土師器・須恵器が出土した。

3　Ⅳ層上面では、土坑 2 基とピット、河川跡を検出した。遺物は土坑 1 基から土師器小片が出土しているのみで、遺構の年代は不明である。隣接するⅠ・Ⅲ区の調査成果から、これらの遺構は奈良・平安時代に所属すると考えられる。検出された河川跡は、笊川の旧河道と考えられる。

4　Ⅵ層上面では、土坑 10 基、溝跡 11 条、性格不明遺構 2 基、ピットを検出した。遺物は性格不明遺構から土師器片が出土しているのみで、遺構の年代は不明である。Ⅳ層上面遺構と同様に、隣接するⅠ・Ⅲ区の調査成果から、これらの遺構は古墳時代後期～平安時代に所属すると考えられる。

5　Ⅹ層上面、XV層上面で検出したが、調査区壁面の観察でⅩ層から掘り込まれていた土坑 1 基を検出した。出土遺物から縄文時代後期に所属すると考えられる。

6　XV層上面では、ピットを検出した。遺物は出土していないが、縄文時代後期の遺物包含層であるXV層から掘り込まれていること及びⅠ・Ⅲ区の調査成果から縄文時代後期に所属すると考えられる。

7　縄文時代後期の遺物包含層であるⅩⅡ層・ⅩⅢ層・XV層を確認した。XV層は調査区の南側で、ⅩⅡ層・ⅩⅢ層は調査区の中央部で確認し、ⅩⅢ層はⅩⅡ層の下面で確認している。確認した範囲は、北側の笊川に向けて傾斜する地形であった。

8　遺物包含層からは、縄文時代後期の深鉢・鉢・壺・注口土器・土製円盤・磨製石斧・打製石器・石核・磨石・凹石が出土している。ⅩⅢ層とXV層はⅩⅡ層に比べて遺物の出土量が少なく小片が多い。各包含層出土遺物に時期差は見られない。

参考文献

相原　淳一　2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年 - 宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から -」『東北歴史博物館研究紀要 10』 東北歴史博物館

小林達雄・小川忠博　1989 『縄文土器大観』4　後期　晩期　続縄文　小学館

小林達雄他　2008 『総覧　縄文土器』総覧　縄文土器刊行会

芹沢長介・坪井清足　1981 『縄文土器大成』3 後期　株式会社講談社

仙台市教育委員会　1981 『六反田遺跡発掘調査報告書 - 名取川下流域の縄文時代中期～平安時代の集落跡 -』 仙台市文化財調査報告書第 34 集

仙台市教育委員会　1984 『六反田遺跡Ⅱ』 仙台市文化財調査報告書第 72 集

仙台市教育委員会　1987 『六反田遺跡Ⅲ』 仙台市文化財調査報告書第 102 集

仙台市教育委員会　1995 『六反田遺跡 - 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ -』 仙台市文化財調査報告書第 199 集

仙台市教育委員会　2000 『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』 仙台市文化財調査報告書第 243 集

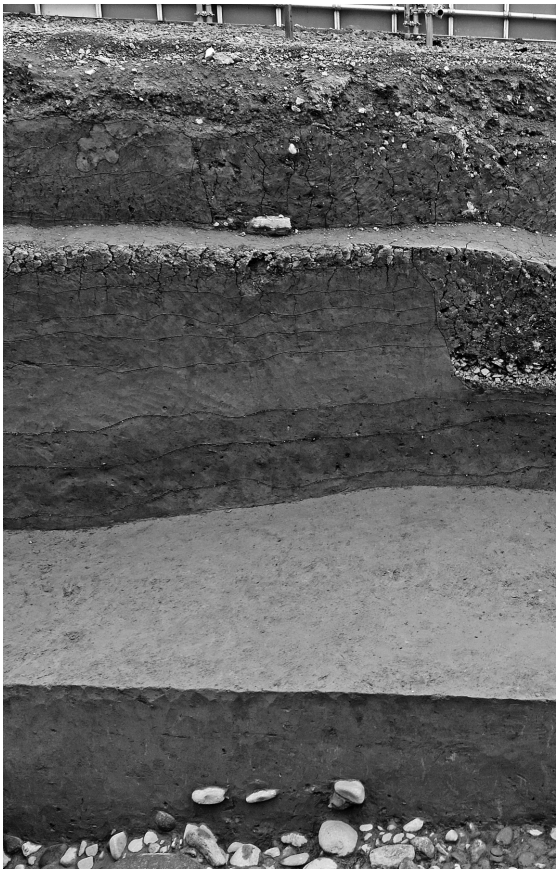
仙台市教育委員会　2011 『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ -』 仙台市文化財調査報告書第 390 集

仙台市教育委員会　2011 『仙台平野の遺跡群 21- 平成 22 年度発掘調査報告書 -』 仙台市文化財調査報告書第 392 集

仙台市教育委員会　2012 『六反田遺跡第 9 次調査』 仙台市文化財調査報告書第 398 集

仙台市教育委員会　2013 『伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内遺跡 - 仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ -』 仙台市文化財調査報告書第 413 集

仙台市教育委員会　2013 『大野田遺跡・元袋遺跡・伊古田遺跡ほか - 仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ -』 仙台市文化財調査報告書第 414 集

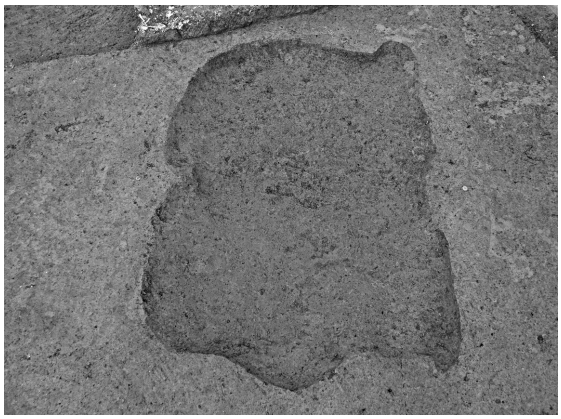

基本層序東壁中央(西から)

基本層序東壁南側(西から)

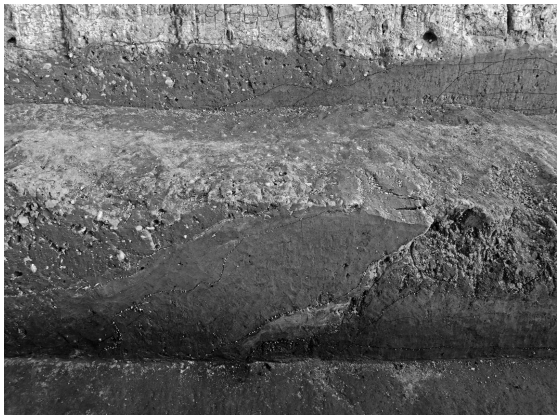
基本層序西壁(東から)

Ⅵ層上面全景(北から)

ⅩⅤ層上面検出状況(北から)


Ⅳ層上面SK2全景(南から)

写真図版1　基本層序・調査区全景・土坑(1)



Ⅳ層上面河川跡断面（西から）

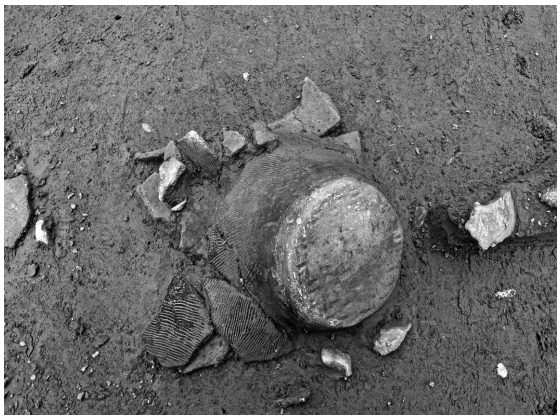
Ⅵ層上面SK3・4全景（東から）

Ⅵ層上面SD2～5全景（東から）

Ⅵ層上面SX1断面A（南から）

Ⅵ層上面SX1全景（東から）

Ⅹ層上面SK13断面（東から）



ⅩⅡ層遺物（A-002）出土状況（南から）

ⅩⅡ層上面遺物（A-003）出土状況（南から）

写真図版2　土坑（2）・河川跡・溝跡・性格不明遺構・包含層遺物出土状況

写真図版3　　土坑・包含層出土遺物(1)

写真図版4　　包含層出土遺物(2)

報　告　書　抄　録

ふりがな	ろくたんだいせき
書名	六反田遺跡
副書名	第14次発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第454集
編著者名	工藤信一郎・渡部弘美・田口雄一・伊藤裕基
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-0011　宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12　仙台市役所上杉分庁舎　℡022-214-8899
発行年月日	2017年（平成29年）3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
六反田遺跡（ろくたんだいせき）	宮城県仙台市太白区大野田五丁目31番3,4,5（みやぎけんせんだいしたいはくくおおのだごちょうめ）	04100	01189	38°21′56″	140°87′16″	2016.9.12～2016.11.17	約156㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六反田遺跡	集落跡	古墳時代～平安	土坑・溝跡・性格不明遺構 ピット・河川跡	土師器・須恵器	
		縄文時代	土坑・ピット	縄文土器・土製品・石器	

要約

六反田遺跡第14次調査区は名取川下流の北岸部に位置する。

Ⅳ層上面・Ⅵ層上面では、土坑・溝跡・性格不明遺構・ピット・河川跡を検出した。遺構の時期は、隣接する昭和57・61年度実施の地下鉄南北線建設に伴う第2次発掘調査のⅠ・Ⅲ区の調査成果から古墳時代～平安時代と考えられる。

Ⅹ層上面では土坑、XV層上面ではピットを検出した。遺構の時期は、出土遺物と遺物包含層、Ⅲ区の調査成果から縄文時代後期と考えられる。

縄文時代後期の遺物包含層であるXⅡ層・XⅢ層・XV層を確認した。各包含層からは縄文土器、土製品、石器が出土している。

仙台市文化財調査報告書第454集

六反田遺跡第14次発掘調査報告書

2017年3月

発行　仙台市教育委員会

宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12　仙台市役所上杉分庁舎

℡ 022-214-8899（文化財課）

印刷　今野印刷株式会社

宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10

℡ 022-288-6123